325
244

始

ヱ1138
325-244

法華經の心髓

大正
6. 10. 16
内交

妙法蓮華經

如來壽量品

第十六

元帥伯爵東郷平八郎

放逸著五欲
墮於惡道中
我常知衆生
行道不行道

衆議院議員犬養毅

序

開目鈔に云く、夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、所謂主師親これなり。又習學すべきもの三つあり、所謂儒外内これなり。又云く、華嚴乃至般若大日經等は、二乘作佛を隱すのみならず、久遠實成を說き隱くさせ給へり。此等の經經に二つの失あり、一には行布を存するがゆゑに仍ほ未だ開權せずとて、迹門の一念三千を隱くせり、二には始成を言ふが故に未だ發迹せずとて本門の久遠を隱くせり。此等の二つの大法は一代の綱骨一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千二乘作佛を說いて、爾前二種の失一つを脫れたり、然りと雖も未だ發迹顯本せざれば實の一念三千も顯れず、二乘

作佛も定まらず、水中の月を見るが如く根無し草の波上に浮べるに似たり。本門に至りて始成正覺を破れば四敎の果を破ぶる、四敎の果を破れば四敎の因破れぬ、爾前迹門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を說き顯す、此れ則ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備はりて、眞の十界互具百界十如一念三千なるべし。斯うて顧みれば華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等、般若、金光明、阿彌陀經、大日經等の權佛等は、此の壽量品の佛の天月須臾らく影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實月の想を爲し、或は入つて取らんと謂ひ、

或は繩を以て繫ぎ留めんとす。天台の云く、天月の識らずして但だ池月を觀る等と云云。日蓮案じて云く、二乘作佛すら猶ほ爾前づよに覺ゆ、久遠實成は又似るべくも無き爾前ずりなり。其の故は爾前法華相對するに、猶ほ爾前こわき上、爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず、本門十四品も涌出壽量の二品を除いては、皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷、其外の法華前後の諸大乘經に一字一句も無く、法身の無始無終は說けども、應身報身の顯本は說かれず。云何が廣博の爾前本迹涅槃等の諸大乘經をば捨てゝ、但だ涌出壽量の二品には付くべき。又云く、一切經の中に此の壽量品ましまさずば、天に日月なく、國に大王なく、山河

に珠なく、人に神のなからんが如し。守護國家論に云く、若し是の法華經を受持し讀誦し正憶念し修習し書寫することを有らん者は、當に知るべし、是の人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此の經典を聞くが如し、當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなりと、此の文を見るに、法華經は釋迦牟尼佛なり、法華經を信ぜざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取るも、此の經を信ずる者の前には滅後たりと雖も、佛在世なり。持法華問答鈔に云く、我即是父の柔輭の御すがた見奉るべきをも、未だ見奉らず、是れ誠に袂をくだし、胸を焦す嘆きならざらんや、暮行空の雲の色、有明方の月の光までも、心をもよほす思ひなりと。

これ等の妙判は日蓮主義の宗教的方面に於ける最高の教義にして、復是れ法華經の心髄、一切教の最深秘處なり、苟も佛教の本旨に透徹し、法華經の奥義を逮得し、日蓮主義の信解に立たんと欲する人は、この妙判の意趣何れにありやを、精究し審思するを要す。若しこの意趣に惑はば、縱し皮肉を獲るとも精髄に到達するに由なけん、心ある人は無垢清淨の直心を發揮し、この妙判に向つて偏に鑽仰の誠を致さんことを。

本書はこの妙判の根據たる如來壽量品に溯つて、縱横に其の眞意を光揚せんと努力したるもの、經旨幽遠にして其の萬一をも講明し得ざりしを遺憾なりとす、幸に宿緣薫發の

人ありて、之に由つて佛教の本旨に透徹し、法華經の心髓を信解し、斯くて日蓮主義の最高教義を體得し、進んで菩薩の願行に立つに至らば、是れ即ち本佛の本意に契ひ、久遠劫來の大恩に酬ふる所以にして、復是れ萬善同歸の要訣ならんのみ。

大正六年秋彼岸會の中日

聖應院日生

法華經の心髓

目次

一　大藏經中に於ける法華經の位置……一
二　宗教中に於ける法華經の位置……五
　イ　道德上よりの考察……五
　ロ　宗教上よりの考察……一六
三　壽量品の絕對的價値……二九
四　壽量品顯說の緣由……二九
五　壽量品に對する日蓮聖人の激稱……三二
六　壽量品を知らざる者は不知恩なり……四〇
七　釋尊の入滅と誕生に於ける眞意義……四三

八　形像舍利と實在の本佛……四九
九　日蓮聖人末流の謬亂……五二
一〇　日蓮主義勃興の好機運……五七
一一　壽量品の眞意を閑却せる大失態……六〇
一二　壽量品の題號の眞意義……六二
一三　低級なる迷信の弊害……六八
一四　壽量品に對する正明なる信解……七二
一五　壽量品の大體の組織……七七
一六　如來誠諦の誠信……七九
一七　三世十方周遍利益……八三
一八　本佛釋尊の顯本……八五
一九　本佛の妙體妙用……八八
二〇　文外の曲解邪說……九四

二一　新田義貞の兜と壽量品……九八
二二　一切經中最大の聖語……九九
二三　惑者、壽量品を解せず……一〇二
二四　本佛顯本の的文……一〇三
二五　五百塵點劫の說明……一〇六
二六　本佛有始の謬見……一一一
二七　本佛を信解せざるの失……一一五
二八　本佛の本土と化境……一一九
二九　迹佛に迷ふを破す……一二一
三〇　本佛絕大の活動……一二五
イ　大慈悲の意輪……一二六
ロ　名字不同の迹佛……一二八
ハ　歡喜法悅の勝益……一三〇

三一　本佛降誕の大因緣……一三八
三二　現身說法の妙化……一四三
三三　本佛感應の妙致……一四八
三四　本佛實在の信仰意識……一五二
三五　本佛の妙智を明す……一五四
イ　慈悲と智慧の不離……一五五
ロ　憂悲苦惱の濟度……一六一
ハ　煩惱罪惡の善化……一六七
ニ　智悲分離の謬見……一六八
ホ　本佛妙智の內容……一七三
ヘ　武士道と生命の永存……一七五
ト　社會主義と唯物思想……一七六
チ　正義の志士と剛健の氣節……一七八

リ　生死超脫の妙訓……一八三
三六　壽量品の絕對的權威……一九二
三七　衆生の性欲不同……一九四
三八　佛敎敎化の眞目的……二〇〇
三九　如來敎化の懇切……二〇一
四〇　如來敎化の熱誠……二〇七
四一　久遠劫來不斷の妙化……二一一
四二　本佛の人格的實在……二一三
四三　因行に約して果德を顯す……二一四
四四　世尊入滅を現ずる所以……二一八
イ　入滅は佛敎の大問題……二二〇
ロ　渴仰の心を喚起す……二二二
ハ　更に入滅の眞意を說く……二二六

ニ　乃木將軍の忠死……二三一
ホ　阿育大王の追慕……二三二
四五　如來教化の不虛を示す……二三六
四六　譬喩即法の意義……二三七
四七　歸依三寶の教義……二三九
四八　三寶の寶たる所以……二四二
四九　本門本尊の中心教義……二四六
五〇　本門壽量の本尊……二五一
五一　譬說段の通覽……二五四
五二　譬說を法に合せての通覽……二五九
五三　擣從和合の大良藥……二六五
五四　信仰に生きたる生活……二七二
五五　世尊病比丘の看護……二七六

五六　今留在此の妙法五字……二八二
五七　遣使還告の日蓮聖人……二八三
五八　父としての信仰意識……二八四
五九　作因了因の相違……二八七
六〇　父子の精神的關係……二九二
六一　父子の機械的關係……二九五
六二　父の死を聞いて心醒悟す……二九八
六三　本佛と妙法との關係……三〇〇
六四　三寶式破壞の謬見……三〇三
六五　三寶の調和的信仰……三〇五
六六　自我偈の功德……三一五
六七　壽量品の通觀……三一七
六八　壽量品は信解の最高依止處……三二六

六九　本佛の顯本を讃美す……三二七
七〇　本佛の活動を讃美す……三三一
七一　方便の涅槃を明す……三三七
七二　本佛の常住を明す……三三八
七三　信眼に本佛を拜す……三三九
七四　渴仰者の爲に身を現ず……三五二
七五　本佛活動の存續を明す……三六一
七六　淪溺を愍みて出現說法す……三六三
七七　十方周遍の活動を明す……三六七
七八　本國土の淨土を明す……三六八
七九　衆生の受苦と惡業の因緣……三七五
八〇　修德質直の人は本佛を拜す……三七七
八一　一代開顯の妙旨を明す……三八三

八二　治子の譬に寄せて實在の義を明す……三八六
八三　本佛は我等の父なり……三八七
八四　方便の滅度は衆生の爲めなり……三八九
八五　衆生に適應せる妙化……三九三
八六　本佛三輪の妙化を結す……三九四
八七　佛敎興立の大精神……三九六
八八　東西文明の決勝點……三九七

以上

法華經の心髓

(一)大藏經中に於ける法華經の位置

今夕は如來壽量品の講演に移るのでありますが、本文の講義に入ります前に壽量品の宗教上の位置――壽量品と云ふお經が宗教の中に於てどう云ふ位置に位するものであるか、又佛教の中に於てどう云ふ位置に位するものであるかと云ふことに就て、ちよッと簡單に申して置かうと思ふ。

法華經が一切經の中の第一であると云ふことは、經文にも明かに出て居る事であるし、又法華經に示されて居る事柄に依つて研究を致しましても、確かに法華經は一切經中に第一のお經であると云ふことは、明かに證明されるのであります。それは唯だ法華經が第一だ〳〵と云ふことを、無闇に言ふのではありませぬ、事實一切經を比較研究を致しますれば、正しく法華經と云ふお經は一切

經中に於て尊といお經であると云ふことが、直ぐ分かるのであります。此の間も加賀の金澤に參りました時に、眞宗の學者石川舜台師が、私の近來書いて居ります所の大藏經要義を見られて「此は善い企てである日蓮主義を以て一切經を解釋して、日蓮主義の立場よりして一切經を社會に紹介すると云ふことは、非常に結構な事である、私も若ければ一つ眞宗の立場から一切經を世に紹介して見たいと思ふけれども、何を言ふにも既に七十七歳の老僧となつては奈何とも致し方がない、本多師は全體年は幾つであるか」と云つて、戸水萬頃と云ふ人に聞かれたさうであります。この戸水と云ふ人は統一閣などへも參つて居つたが、私の年を大分若く見て居る、何時も大きな聲で演說するのを聞いて居るものであるから、幾歳と云つたか分らんが餘程若いやうに言つた、或は無理に若く言つたのかも知れぬけれども「未だ〳〵若い坊さんであります」と話したさうであります。すると石川老師が「さうかな、感心な人だ」と言つたさうであります、そこで私は戸水君に傳言を賴んで置いた、「感心な坊さんだと石川師が言つたと云ふことであるが、それは洵に有難い、私も石川老師は大きい人だと思つて、其の人格に對しては敬意を拂つて居るから、若かつたならばさう云ふ元氣を以て、眞宗の立場から一切經を講釋して見やうとの考も起された譯であらう、人物は石川師は吾輩などの比較でない、數等偉大なる人であり、學識も亦深い人であらうけれども、唯だ石川師に傳へて欲しいのは、人物としては吾輩は何も感心せらるゝやうな者でないが、子供の時分から學んだのが日蓮聖人の敎であり、天台の學說であり、基く所が一切經の中の法華經と云ふお經に依つて居るのである、石川老師は人物としては非常に偉い人だけれども、眞宗から一切經を觀るとすれば、どうしても淨土三部經から觀なければならぬ譯である、淨土三部經からでは如何に偉い人でも一切經を自由自在に開顯統一すると云ふことは到底出來まい、年取つて居られて幸であらう、若くつても到底出

來まい」と云ふことを傳言して呉れと言うて置きましたが、果してどう云ふ工合に傳言が屆くか、それは分りませぬけれども、確かに法華經と云ふお經は、一切經の中に於て最も立派なお經であります、傳敎大師も秀句と云ふ書物の中に述べられて居る『自讃毀他にはあらず』――自讃毀他と云ふのは、自分を讃めて他を毀ると云ふことであります、天台宗が偉い、法華宗が偉いと云ふやうな事を言ふのは、何も自分の方を手前味噌で讃め上げて、他を惡く言はうと云ふやうなそんな卑しい感情から言ふのではない、是は決して、自讃毀他にはあらず、所依の經に依る――據り處にするお經が一番尊といお經であるものだから、何となく法華の坊さんが威張るやうなことに見えるのである賴りにする所が一切經中の第一たる法華經であるが故に、他の宗旨に對して法華宗が威張るやうに見える譯で、其の人が威張るのではない、敎が尊といのであると言はれて居る、左樣な譯で法華經が一切經の中に於て秀でゝ居ることは申す迄もありませぬが、更に之を擴げて世界中の有ゆる宗敎、及び其の宗敎の基いて居る所の經典に就て見ましたならばどうてあり、ありませうか。

(二)宗敎中に於ける法華經の位置

世界最高の宗敎として現今目せられて居るものは基督敎と佛敎であります、而して基督敎のお經と云ふものは即ち聖書でありまして。是が舊約全書、新約全書を合せて六十六卷あります。其の中には中々善い事も記されて居るのでありますけれども、併し法華經の敎訓と比較致しますれば、基督敎の聖書は哲學上の要素から考へては、無論比較にならぬ程淺薄であります。法華經に光顯せられて居る所の哲學的眞理は、基督敎の聖書とは比較すべくもない高いものでありまして、それは相撲にならないのであります。

(イ)道德上よりの考察

道德的敎訓と致しましては、國を異にし人情を異に致して居ます上からは、

西洋の人は基督教の聖書に出て居る道德觀の方が良いと言ひませう、東洋人の立場からは勿論法華經の方が良いと言ひませう、是は歴史を異にし人情を異にして居りますが爲に、東西の人々の判斷が違ひませうけれども、併し段々文明が接觸を致しまして、西の文明、東の文明とサウ判然別けることの出來ないやうに、世界を通じて一の文明を造りました時分にはどうでありますか。基督教の道德觀の特色は個人的の所と、家庭に於ては夫婦本位である、それから博愛主義を說けば、どうも國家と博愛との關係が十分に消化されて居らないやうである、法華經の方は無論個人の特色をも認めますけれども、更に四恩の說を佛教の根據として居りますから、どうしても家庭に於きましては父母の恩を本位と致します。結婚したからと云つて、結婚の晩に直ぐ教會から停車場へ駈付けて、新婚の旅行だとか云つて夫婦手を携へて他所へ行つてしまふ、さうして或は十日或は一ケ月旅行をしまして歸つた時分には、親の家には歸らないで別に

家を拵へて置いて其處へ入り込むと云ふやうな事は、西洋の人情風俗と致しましては其の方が良いと今まで言つて居りましたが、どうも段々研究して見ると西洋の方でもそれはいかぬ、やはり家族と云ふものは親密にして、親兄弟皆一緒に寄らんければいかぬと云ふやうになつて來た。何故いかぬかと云ふと人間の德性が開發されて來ない。家族主義であると云うとお父さんがありお母さんがあり、兄弟があり召使があり親類があると云ふやうな譯であるから、そこで自らお父さんを尊敬するやうな考を起し、又お母さんに優しうして戴くが爲に導かれる所の德性と云ふものがある。其の他兄弟召使皆寄つて居るから、そこで色々な人間の社會を組立てゝ行く所の溫かき人情と云ふものが、家庭で養成されるのである。それは一部の者は、親が無ければ面倒がないと云ふやうな考を有つけれども、其の代りに其の人間と云ふものは得手勝手な者になつてしまふ。恩を受けても恩に感ずる考もなく、自分の精神を引締めることが出來なく

なつてしまふ。朝寢をしたいと思つてもお父さんやお母さんが居れば叱られると思ふから早く起きる、けれども若い夫婦同志ならば、「モう少し寢て居ませう」「ウン宜からう俺も賛成だ」「それぢや即決しませう」なんと言つて、十一時でも十二時でも、何時までも寢て居る。「朝飯を食べなければならないてせう」「ナーニ二人とも食はなければどうでも宜いぢやないか」と云ふやうなだらしのない事になつてしまう。そこで早くより家庭を出ると云うと、人間の德性がどうしても養はれない、寄宿舍生活をした人間でもいけない、寄宿舍なんぞに居ると、饅頭を買つて來て喰つても、外の生徒が居る時に喰へばそれにも遣らんければならぬと思ふから、ソッと人の居ない時に喰つて居る、階段の方でガタ〳〵と音がすると、急いで机の抽斗へ入れてしまつて知らん顏をして、又行過ぎてしまうとソット出して喰ふと云ふやうな事をする。假令僅かの物でも其處に居る者は皆一緒に喰ふと云ふ——子供同志が小さな饅頭を二つに割つて、半

分上げませうと云つて分け合ふやうな、さう云ふ人間の優しい情と云ふものが寄宿舍生活をして居る間にスッカリ無くなつてしまう、掃除をするのでも自分の受持だけしか掃除しない、喧ましく小言を言はれると「私の所は綺麗です、向ふの隅は私の分擔ではありませぬ」と言つて平氣で居ると云ふやうになつて有ゆる方面が個人的になつてしまう。況してや西洋の個人主義と云ふものは、今まで非常に善い思想のやうに言つたけれども、其の流れる所は遂に社會國家を危うするが如き有樣になつて來た。即ち個人主義の極端に赴く所は社會主義である、社會主義と個人主義とは言葉ではまるで違ふやうであるけれども、社會主義と云ふものは個人主義を極端に推進めて、此の人間の社會は個人々々の自由、權利、利益をば絶對に認めると云ふことであるから、社會主義とは言ふけれども、社會全體の幸福よりは寧ろ個人本位のものであります、故に貧乏人も金持も皆一緒である、共産主義と云つて共に同一にその利益を得やうと云ふ

其處に在る物は皆が分けて食ふ、即ち握り飯なら握り飯が其處にあれば、皆が同じやうに食はう、八つ握り飯があれば四人で二つ宛食ふ、體の大きい奴も痩せた奴も皆二つ宛だと云ふ主義であります。であるからどうしても社會主義と云ふものは個人主義の結論である、個人主義を極端に推及ぼして行けば、どうしても社會主義に入らんければ徹底しないのでありますから……。途中で引懸つて居れば個人主義の方が人の權利を尊重し、さうして自由で結構であるやうだけれども、其の結構を推詰め行けば、遂に財産と云ふものゝ權利も共通的にしやう、法律と云ふものは必ず不公平であるから、法律を全廢しやうと云ふことになつて、無政府共産主義にまで到達する、こゝに初めて個人主義が徹底するのである。そこで今まで個人主義を餘り褒めて居つた爲に、遂に社會主義まで「ドーッと押寄せて來たから「是は堪らぬ、待つて呉れ」と言つても「馬鹿なことを言へ、此處まで來たらモウ駄目だ」と云つて豪い勢で押寄せて來た。今

日見渡す限り此の世界に個人主義の流が滔々として押寄せて居る。此の荒浪は何處の岸まで打付けてどう云ふ結果になるかと觀て居ると、ガラ〳〵ッと先づ護岸を破壞する、今まで積んであつた堤防がグラ〳〵ッと崩壞る、さうかと思うと其氾濫したる水が部落を襲うて田の中に流れ込む、田だけかと思うと今度は家を倒し人畜を禍ひする、恰も海嘯のやうな勢で押して來て居る、見渡す限り、此の滔々たる荒浪の如き勢を如何にして防いだら良いか、困つたものだと云ふ聲は世界に滿ちて居る、是が即ち個人主義の落付く所であります。（拍手）今日の戰爭に於て所謂自由民權本位であるとか色々言うて居りますけれども、制限せられたる自由主義であるならば、合國が主張する所も眞理があるが、獨逸のやうに極端な軍國主義、極端な專制抑壓を用ゐると云ふことは無論い

けないが、總て人生の事は程度の問題であります。自由であるからと云つて、其の赴く所、絶對の自由で自分が頭の上には何者も載せることは出來ないと言ふけれども今私の頭の上には蟬が留つた。（笑）諸君は蟬の留つたのを見て笑ふけれども、諸君が家へ歸ればやはり諸君の頭の上に蠅が留まるであらう。諸君が俺の頭の上に乘る者は何者も無いと言ひ居る内に、ヒョッと蠅が留まる、俺の頭の上に乘る者が無いどころではない、此の頭の上にはお父さん、お母さんが乘つて腰を掛けられても致方のないものである。所謂佛敎に於ては、兩肩に荷負すとも報ずること能はずと說く、恩義を受けた人に對しては、此の頭の上に千年萬年――その人を乘せて御奉公しても報じられぬと敎へてある。（拍手）西洋の人は此の頭の上に乘る者は無いと言ふ、そんな事を氣が利いたことのやうに思つて、日本人が眞似をして、俺の頭の上には何者も乘る者は無いなんと言つて居ると、蠅が來てヒョイと留まるであらう。佛樣の頭の上には肉髻相と云

迷う蟬の御の頂
にとまりけんば

ふものがあるが如來の頂と云ふものは無見頂相と云つて、何者も見ることが出來ないと云ふ事である。そこで目連尊者と云ふ神通のある人が、佛樣の頭の上には肉髻相と云ふものがあるさうだが、どう云ふ物か一遍拜見したいものであると思つて、自分の神通の力で以て少し斯う上に上つて之を見やうとした、所がやはり佛樣の方が少し高い、そこで又少し上つた、やつぱり高い、又上つたやつぱり見えない、何處まで行つても佛樣の頂を上から覗き下すことが出來なかつたと云ふので、之を無見頂相と謂ふのであります。是は神祕のやうな話であるけれども佛樣の頭の上から覗いてやらうと云ふ譯には行かないのである然らば何故佛樣がさう云ふ尊とい姿を得たかと云ふに、斯う云ふ尊とい姿は、親の前に頭を下げ、君の前に頭を下げ、尊とい所の佛樣の前に頭を下げ、敬ふべき法の前に頭を下げ、或は他の尊敬すべき所に頭を下げたが爲に、佛になつてからは其の頭の上を何人も覗くことが出來ないと說くのである。（拍手）それ

だけの徳を積み行を積んで、敬ふだけ敬ひ切つて偉くなつて、それで他の者が見やうと思つても見えぬやうになつたならば宜いけれども、何にも徳を積まないで自分ばかり偉がつて、俺の頭の上には何者も無いと言ふのは駄目である、それは低能な人間の考へる事である。頭を下げると人が馬鹿にするからと云つて、お辭儀をするのでも向ふてしなければ頭を下げない、向ふがどの位頭を下げるかと思つて見て居る、さうして向ふから頭を下げないのに、此方から下げることがあるものかナンと言つて居る人間は、強いのでも偉いのでもない、薄馬鹿なのである。（笑）

そこで基督教と佛教との道徳の比較は、そんな事で比べては餘り粗末な比較ぢやないかと言ふ人がありませうけれども私は其處が一番大きな問題であると思ひます。西洋人の道徳は、此の頭の上に何も乗せぬ〳〵と言ひながらドンン頭を踏付けられて居る、日本のは下げる所に頭を下げるから、遂ひに此の頭

の上は誰も覗くことが出來ぬやうな徳が整うて、無見頂相に達する頭である、此の一事でも頗る明瞭である。何れにしても一々比較する迄もない、どうしても西洋の道徳と云ふものが、日本の道徳より高いとは言はれない。是は日本人が遠慮して、サウ他の國の事を悪く言ふてはいかぬから西洋にも善い道徳があると言はぬと工合が悪いと思ふけれども、それは僞りである、悪いものは悪いと云ふが良い、餘まり今まで遠慮ばかりし過ぎるから、日本の道徳の價値が分らなくなるのである。何もそんな事を遠慮したからと云つて、彼等が日本人は遠慮深い人間である可愛がつてやらうと云つて、舞妓を可愛がるやうに日本人を可愛がると思ふのは間違である。チャンと己の信ずる處に信念を据へて、世界に日本人の奉戴する所の道徳の思想は是であると、大膽に示す所の自信力を有つて、堂々と進み行く國民でなければ、世界の尊敬を得ることは出來ないであらう。故に私は法華經は基督教の經典に比ぶれば、道徳觀の上に於ても確か

に勝れて居ると云ふことを斷言するのであります。

(ロ)宗教上よりの考察

それから次に宗教としてはどうであるか。宗教として比ぶべき問題は澤山あるが、一番大事なのは基督教で戴いて居る所の神樣と、壽量品に顯はれて居る所の佛樣、是が何方が能く整うてどちらが立派であるかと云ふことである。神樣それ自身、佛樣それ自身はどの位偉い方であるか、是は分らぬことである。其の敎へる所、說明する所に依つて、神や佛の價値と云ふものは定まるのである。此方が一番偉い、イヤ此方が一番偉いと言へばそれまでだが、神樣のどう云ふ所が偉いか、どう云ふ風に偉いかと段々研究して行くと、其處に比較が出來る。丈が高いと云つても唯だ非常に高いては分らぬ、どの位高いか、此方は七尺高い、イヤ此方は七尺五寸高い、さうか、それでは此方は八尺だと云へば此が一番高い譯になる、宗教の神や佛は、信ずる者から見れば皆それが一番偉

いものである、天理教の神樣でも十柱の神とか宜い加減な事を言ふ、それでも其の信者は是が一番高いと云つて居る、併しそんな事を言つて居つては分らぬから、先づ冷靜に基督教で立てる神はどう云ふものかと考へて見ると、第一に彼等が誇りとする所は一神主義である、神は唯だ一つである、天に在ます吾等の父は必ず一人である。だから基督教では必ず人指を押立てゝ『天に在ます一人の神よ』と言ふ、まア指一本の神である。(笑)併し此の指一本と云ふことは非常に善いことで、宗教の信仰と云ふものは、どうしても絶對にして一に歸するのであるから、心を一にして信ずると云ふ譯で、一心正念と云ふことは善いことである。其の纏つた所は一つに違ひないが、今度其の神樣が働いて出る方を考へんければならぬ、靜として居る神は一つて宜いけれども、多勢の者を救ふが爲には即ち働いて出なければならぬ。さうすると時を異にし、所を異にし、色々の事情に依つて、其の絶對の靈格者が働く場合に於ては、幾つにもな

つて現はれて來なければならぬ、時代が違い所が違ふが故に名前も違ふやうになつて現はれて來る。それを基督教の方では許さぬ、天に在ます神は何處にも現はれて來ない、唯だ耶蘇と云ふ人を神の子として使に出した、それ一人切りだ、斯う言ふのであります。そこで東洋にあるお釋迦様であつても孔子様であつても、日本の天照大神様であつても、それは神様はさう云ふ使を出した覺えはないと云ふ、然らば神から遣はされない者はどんな者かと云ふと、それは皆罪の子ぢやと云ふのが基督教の教義である。創めてアダム、イヴと云ふ者が神に造られたが、それが神の教に背いて蛇に騙されて花園の木の實を取つて食つた、それが爲に原罪と云つて人類の根本の罪を作つて、それから產み擴げた子孫であるから、親の罪が子に報ひ、孫に報ひ、曾孫に報つて、幾ら行つても罪が免れ得ないと云ふ妙な道德律であります。此方の知らない時分に神が造つた人間が惡い事をして罪を作つたのを、それを何時までも吾々が受けて居ると云

ふ、それはどうか西洋人だけに限つて置いて貰ひたいものだと思ふ。（拍手喝采）所がさう云ふ思想を持つて來て、お釋迦様であつても是は即ち罪の子である、天照大神様でも罪の子である、サウはつきり言うたら困るから言はぬけれども教はさうである。神の子と云ふ者は耶蘇の外にはない、他は悉く罪の子である。其の罪の子等の罪に代る爲に、耶蘇は磔になつて下すつたんである。此の磔になつた爲に釋迦も救はれ、天照大神様も救はれ、皆救はれるのである、だから十字架を拜めと云ふことになつて居るが、さう云ふ說明と云ふものは其處に狹い所があり、拗れた所があり、淺い所があり、詰らぬ所があり、値打のない所がある。基督教を信ずる人も此の中に御座るだらうから、斯う云ふ風に激しう言うと惡口を言ふとお考へかも知らぬが、併し惡口を言ふのではない。基督教の神様は確かに說明が拙いです。それは縱令詰らぬ女でも、自分が惚れ込んで居れば自分の女房が一番良いやうに思ふけれども、能く〳〵考へて見る

と縹致も惡いし行儀も惡い、物を言はしても碌な事は言はぬ、其の上に朝寢て仕樣がなくても、まア俺の嬶が一番だと思つて居れば天下泰平のやうなものだけれども、(笑)併し宗敎の本尊と云ふものはさう云ふ事てはいかぬのてある。そんな事て濟まして置けば、世界各國に亘つて是から宗敎の關係に於ては詰らぬ喧嘩ばかりしなければならぬ。佛敎の方から言へば、基督も偉い人だと敬ふ、基督ばかりてはない、印度の婆羅門の神でも偉いと敬ふのてある。處が違つて現はれたから少し言ひ分は違ふけれども、兎に角人を救ふが爲に磔になつた人は、尊敬に價する人てある、基督が泥棒や人殺しをして磔になつたのなら詰らぬ者だけれども、さうてはない、少し考は淺いにしても、此の世の中の人の罪に代ると云ふ考は惡い事てないのだから佐倉宗五郎も今では神に祭られて居る基督もやはりあゝ云ふやうな部類の人だと云ふことは佛敎では認める。併し耶蘇だけが非常に偉いやうに思つて居るのは間違つて居る、無闇に耶蘇が偉いやうに思つて、どうも耶蘇と釋迦と比べたり、日蓮聖人と比べたら失敬だと云ふやうに、頭から腹を立つて仕舞のは間違つて居る。何も腹を立てることはない其の中に加へて貰へれば寧ろ光榮として喜ばんければならぬ。(拍手)冗談ではない、本當の事てある。冷靜に研究せられたならば耶蘇が有つて居つた偉い意味合……耶蘇は學問もしないて、大工の子てあるけれども靈格を有つて天來の神秘を說く要素を有つて居つた、或は其の學問しなかつた所が偉いと言ふけれども、さう云ふ者は外にも澤山ある。古來學問が無くして少しばかりの不思議な行ひ、神秘な言動をしたと云ふ者は、日本にても千人でも二千人でも居る。其の中に於て耶蘇が少しそれ以上に人格が高かつたと云ふことは言うても宜いけれど、唯だ彼が學問をしないから偉い、釋迦が學問をしたり、理窟が精しかつたから駄目だと云ふのは、まるて田舍者騙しの愚論てある。此の文明の世の中に、そんな僻論、愚論を振廻して足れりとするならば、到底眼の明いた日本人

を教化することは出來まい。（拍手）故に佛教では決して左樣な狹い事は言はないのであります。お釋迦樣が印度に出た時分には、印度の婆羅門教で尊敬した神は皆包容して居る。梵天王と云ふのも帝釋天王と云ふのも、皆婆羅門で尊敬して居つた神であるが、それは結構であると云つて包容して居るのである。日本へ來ても日本の神は皆尊敬する、而も無理やりに尊敬するのではない、人が尊敬するだけのものはそれだけの尊とい者として認めなければならぬ。それは何故かと云つたならば佛教は本佛から働きが顯はれて行く時分には、どのやうにも身を替へるものである、非常に大きい形で現はれることもあり、小さい形で現はれる事もある、二十も三十もの用を帶びて現はれる事もあり、二つ三つの用で現はれる場合もあり、或は一つの用で現はれる時もある。內面から言つたならば皆一つであるけれども、現はれる場合には違ふ、例へば一つの例を引けば、近來日本で偉かつた人は伊藤博文公でありますが、伊藤公が家を出て行

くと云ふ場合には、或は內閣に行つて日本の政治上の大事を論じて、國家の興廢が岐れるやうな相談をしに行く時もありませう。又今日は一寸友達の所へ碁を打ちに行きたいと思つて出掛けることもありませう。それから又或時には、用もないけれども其處らをブラ〳〵歩いてさうして夜店で古ぼけた急須の缺けたのを買つて歸ることもありませう。伊藤公が家を出た、用事は何だ、國家の大事だと云ふことばかりではない。やはり三錢五厘の急須の缺けたのを買つて歸られるやうな事もある、それでもやはり伊藤さんである。又親類なら親類に譯の分らぬ婆さんがあつて、文句ばかり言ふから、『伊藤さんどうか一つ來て話して貰ひたい外の人では婆さん言ふ事を肯かぬから』と云ふ時に、其の婆さんに向つて、『まあ〳〵そんな喧ましい事を言ふものではない』と云つて話した。伊藤公の爲に婆さんが無理を言はなくなつたと云ふ事もあらう。嫁がどうしたとか斯うしたとか、糠味噌の漬け方が惡いと云つて叱るのがなほつた、伊藤公

の力で糠味噌問題解決せりと云ふ事もあるだらう。（笑）そこで神様の方から云うても、人を救ふ場合に詰らぬ事であつてもその人に於てはそれが重大なことである、やはり千里の堤も蟻の一穴より壞れると云ふやうなものであつて、今日の歐羅巴の大戰爭も、一人の人間がピストルで以て墺地利の皇太子を擊つたと云ふことが近因で、即ち拳銃一發遂に世界の戰亂を捲き起すと云ふやうなものである。そこで神様の方から觀て、是は詰らぬ事だけれども此の糠味噌問題を解決せざるに於ては、遂に世界の大亂を惹起す憂がある、大變だと思はるれば其の時は小さな用でも、本佛が糠味噌問題の爲に現はれて來らるる。併しそんな問題の爲に堂々と一切經を說く譯には行かないから、そこで話も小さければ現はれも小さい。だから其の現はれだけ見たら詰らぬやうだけれども、本は皆本佛の顯はれであると云ふやうに、大きく出ても小さく出ても皆本へ戻せば一つである。併ながら本の一つと現はれた末を混淆すると云ふことも亦出來な

い、やはり小さく現はれた時は小さい用であつたと云ふことを認めなければならぬから、神様も小さい用で顯はれて來たものは小さい神様である。本は一つでも顯はれが小さいのである。それを本が一つだからゴチャ混ぜにしても宜いぢやないか、お釋迦様の本佛も、鬼子母神も毘沙門も、或は烏芻沙摩明王と云ふ雪隱の神様も同じて宜いぢやないかと云ふは、それはいけない。本地と顯現とは內面に於て一致して居つても、現はれた以上に於ては其の資格を混亂すべからずと云ふことを明かにしたものが法華經であります。

斯う云ふやうに何でも聞いて見ると法華經の方が善いのである。半分しか聞かぬから澤山の神がバラ〳〵になつて居るやうに思はるるけれども、それは觀方が足りないのであり、又一つの神を見て居る一神敎も善いけれども、唯だ一つの神と其の神の子である基督ばかりを尊敬せよと云ふから、伊勢の大廟に行つても之を神として尊敬することが出來ない。國民としては頭を下げるけれど

も、宗教としては下げるんではありませぬと言つて、言譯をしてお辭儀をして居るではないか。（拍手）さう云ふやうな窮屈な思想が入り込んで來て、それが爲に到る處に衝突を起して、隨分基督教の爲に面倒を捲き起して居るのである。宗教は人類の爲に益ありや否やと云ふことを疑はしめたに就ての責任は、基督教はどうしても之を逃れることは出來ぬ。（拍手）隨分厄介な問題を人類の間に提供したが故に、宗教は大事であるけれども餘りやると飛んでもない事が起るから警戒を加へなければならぬ。宗教は人類に必要だけれども亦それに恐ろしい害毒の伴ふものであると云つて、人が宗教を信ずるに深く警戒を加ふるに至つたのは、基督教の歴史の禍ひてある。であるからさう云ふ窮屈な神の説明よりは、法華經の本佛觀の方がズッと立派であると思ふ。嘗て日本に來て居つた學者で、アーサー、ロイドと云ふ人がありますが、前年柴田一能君が天晴會の講習會に於て「新基督教」の標題の下にロイド博士の基督教觀を説明したことがあ

る。てロイド博士が言ふには、今までの基督教は淺くて駄目てある、モウ少し之を深く説明すると、どうしても基督教の神は一つだけれども、働いて幾つも〳〵分れて出られると云ふことにしなければいかぬ。法華經はさう云ふ風になつて居るが、さう云ふ風になつて居る原因は元と基督教にあつたのである、基督教の思想の方が先きに有つて、法華經は之に倣ふたので、ズッと後の年代である。是は基督教の教義が法華經に入つたので、本へ戻せば基督教のものであると云ふことを主張したのであります。此の基督教と法華經の前後と云ふことに就ては、歴史的に調べたならば、その謬見たることは明かであるが、兎に角法華經にある思想が本當の基督教の思想である、本家の倉にあるべき寶が分家の倉に納まつて居るのだから、本へ戻して呉れと云ふことをアーサーロイド博士が言つたのは、其處には嘘もあり間違もあるけれども、兎に角法華經の倉に這入つて居る寶が基督教に於ても一番大事な寶であつて、將來に基督教の活く

べき寶を喪うて居ると言つたのは、博士の偉い所であります。それを考へないて法華經とか佛教とか云へば詰らぬ物のやうに思つて、一概に排斥するクリスチャンは、少しも佛教の事を研究しない人で、其の人は智識の缺乏して居ることを表白するに過ぎないのである。

さう云ふやうな譯で、宗教として比べても、基督教の經典よりも遙に立派なのである。それから他の宗教の經典に比べると云ふことになれば、即ち回々教のコーランであるとか或は其の他印度教に於ける所の四韋陀であるとか、色々それは他の宗教の經典があります、又相當値打のあるものもありますけれども總て是等と比べて見れば法華經の方が上であると云ふことは、天下の公論であります。モウ基督教のバイブルに比べて是等の者が文句を言はぬだけに法華經が上だと云ふことになれば、世界の有ゆる宗教を通じて、法華經は所謂世界第一の寶典、世界最高の經典であると云ふことを言ひ得るのであります。

(三)壽量品の絶對的價値

其の世界最高の經典である所の法華經の中に於て、壽量品が一番大事な魂だと云ふことになつて居るのであるから、是よりお話する所の壽量品なるものは、世界の人類を導くべく作られた經典、人類あつて以來今日まで何萬年經つて居るか知らんけれども、約二十萬年位經つて居ると云ふ說がある其の間に人間の文明が作つた宗教の經典に於て、最高の教義を說明せしものである、其の壽量品に就て是からお話するのであります。

(四)壽量品顯說の緣由

それから此の壽量品に來たる前からの聯絡を一寸お話しなければならない、是は涌出品第十五の所に於て、本化の菩薩が顯はれたまふたのを見て彌勒菩薩達が疑を起した、どうも見渡す所お釋迦樣は此の間四十餘年程前に、悉達太子から佛になられたのである、此の菩薩達は非常な老人のやうに見受けられるが

誰が敎へたものであるか」と云つたので、お釋迦樣が言はるゝには、「何も疑ふことはない、此の本化の大士は俺が敎化して發心せしめ、さうして斯の如き菩薩にしたのである、だから此の通り俺の前には皆頭を下げて、五十小劫と云つて丁寧に禮を作して居る、見よ、此の通りではないか本化の菩薩は我れ釋迦牟尼より偉いと云ふことはない、頭を下げて居るではないか」と、其の時に彌勒菩薩が「どうも頭を下げらるゝ所を見れば、それに違ひありませぬが、私は世尊の側を離れたことがない、世尊の成道以來四十餘年、世尊の左右を離れずに附いて居つたが、どうも斯う云ふ菩薩を敎化されたことを知らない、或は內密に私が寢て居る間にても敎化なさつたのであるか、どうも此の事信じ難し、譬へば二十五歲の若い人が百歲の老人を捉へて、此の白髮の老人は百歲の如く見えるけれども、實は我が生んだ子である、其の證據には此の老人達が我が前に頭を下げて、さうして我の事をお父さん〳〵と言つて居るではないか、我は若いやうに見えても此の老人は全く我の子であると言つた時に、之を人が信じませうかどうでありますか」と云つて、釋尊に對して疑を起した、是が彌勒菩薩の始覺に對する疑問と云ふのであります。始覺と云ふのは初めて天竺で悉達太子と云ふ人間が行を積んで、菩提樹の下に於て正念不動三昧に入つて一切の煩惱を斷じて無上道を成就した、それより已來四十餘年を過ぎたり、然らば此の多勢の菩薩達が世尊のお弟子であると云ふことは信じられませぬと云つて、彌勒菩薩が疑を起した、其の疑に答ふべく現はれたものが壽量品である、汝等諦かに聽け、是より汝等の疑を釋いてやらうと云ふことになつたのであります是が法華經の涌出品から壽量品に移つて來る表面に現はれて居る事柄であります。

日蓮聖人は更に深く之を解釋せられて、表面は彌勒の疑に答へるのであるけれども、實は佛敎の眞實を說かれるのである、顧みれば最初鹿野苑に於て阿含

の經を說き始められしより今日まで四十餘年、樣々の法を說いて衆生の機根を整へたまふたのである、其の四十餘年間調養說法と云つて樣々に法を說いて來て、こゝに法華經を說くべき時に達し、愈よ法華經も序品より過ぎ去つて今涌出品第十五に至つた、此の間には樣々な結構な敎もあるけれども、未だ釋尊が此の世に出られた眞實の目的を說明されて居らない、自分自身が如何なる佛であるか、後來の人が佛敎を信ずるに就て其の信仰の標的となるべき所の方が誰であるかと云ふことに就て、未だ說明が出來て居らぬ、そこで此の壽量品を說かれるのは、釋尊が世に出られて色々說かれた一切のお經を活かすか活かさぬかと云ふ問題に押寄せたものであると、左の如く日蓮聖人は解釋せられて居るのであります。

(五)壽量品に對する日蓮聖人の激稱

聖人の開目鈔と云ふ御書には

一切經の中に此の壽量品ましまさずば、天に日月なく、國に大王なく、山河に珠なく、人の神のなからんが如くにてあるべきを。(遺七九〇)

と仰せられて居る。天がどれ程廣くてもお日樣とお月樣が出なかつたならば眞闇がりで、緣の下も穴の中も同じものである、人が天を仰いで尊いものとして禮拜するのは、お日樣が出られお月樣が出られるからである。夜眞暗がりでも又其處にお日樣が出られると思ふから人間は天を仰向くけれども、初めから終りまで空中に日月の光を發射しない、眞暗がりであつたならば、誰も眞暗がりの天を見て有難いと思つて頭を下げる者は無い、佛敎にどれ程澤山お經があつても、壽量品がなかつたならば天に日月の無いやうなもので、一切經は暗がりとなつてしまう。又人に神のなからんが如しと云ふのもその意明かな事であつて、人間が色々な働きをする——足で歩くのも手で仕事をするのも、口で物を言ふのも眼で物を見るのも、一切萬端心の作用である。魂が一つなくなつたな

らば眼も見えなくなり、物も言へなくなつてしまう。一切經の手が動き眼が動き身が動いて、四肢五體自由自在に活躍すると云ふのは、壽量品と云ふ魂が一切經の中に活きて居る爲に、一切經がそれ〴〵の効能を現はすのである。若し壽量品を引拔いたならば、法華經二十七品も人の魂を喪へるが如く、一切經七千餘卷の經文即ち佛敎の全體も魂を喪ふのである。それから國に大王のなからんが如しと云ふことも、佛敎は國家主義であり又君主主義でありますから斯う云ふ喩が出て來るのでありますが、是は支那の今の有樣を觀れば能く分ることである。西洋のやうに初めから大統領政治が行はれて居る國は別でありますが、東洋の有樣から見ますれば、支那に王樣が無い爲に袁世凱が大總統となり黎元洪が出、今度又馮國璋が出るのでありますけれども、どうも支那の有樣は洵にグラ〳〵して、黎元洪が日本の公使館へ逃込んだとか、一寸歸つたかと思うと今度は佛蘭西の病院へ飛込んだと云ふやうな事になりましては、如何にも彼の廣大な四百餘州、四億萬の國民も、一國を成して居るとは思はれないのであります、又露西亞が强大なる帝國でありましたけれども。一朝革命の烽火に依つて皇帝が倒れまして以來は、勞兵會などと云ふものが勢力を得まして、今日は一寸油斷をすれば戰爭をしないやうになりさうに見える。逃亡兵が非常に多い、師團逃亡兵と云つて一師團の兵士が殆んど悉く逃亡兵であるから、銃殺すると云つても小銃を以ては殺し切れないから、逃亡兵を砲殺する——大砲を以て一師團を悉く擊ち殺すと云ふ騷ぎである。凡そ人類の歷史あつて以來、卑怯未練の奴も多いが、一師團二萬人の兵隊が逃出すから、是は小銃では間に合はぬ。大砲を以て砲殺すると云ふやうな事は、人類歷史あつて以來無いことであります。それで逃亡が止まつたかと云ふと、未だ〳〵一師團位を殺したのでは止まるまい、モット〳〵澤山あるけれども、それはどうも一々殺し切れぬと云ふことである。是は事實はモッと酷いでありませう、新聞に現はれる事よ

り、事實の方がモッと酷いメチャ〳〵な混亂の狀態が各方面に起つて居ることと私は想像する。又是は全然想像でもありませぬ、日本の方からもそれ〴〵彼の地に行かれて、露西亞の革命後の狀況を視察されて居る人もあります。それは世間の政治家にもあり、陸軍にもあり海軍にもある、皆それ〴〵の方面から行つて居られませう、軍服を脱いで變裝して普通人になつて行かれた人も澤山ありませう、夫等の報告と云ふものは秘密にせられて居りますけれども、サウ何もかも秘密にすることもないのでありまして、隨分と混亂の狀態に在ると云ふ位な事は、見た人が皆言ふのであります。是は一國如何に大なりと雖も、國民如何に多しと雖も、其の國を統一する所の王樣が無くなつて勞兵會などと云ふことになりますと云うと、あゝ云ふ風の有樣になつてしまうので、あれて露西亞が戰爭を止めることになれば、全く獨逸をして益々兇暴を逞うせしむることになるのであります。此の頃でも既に戰線に於ては獨逸に追捲られて、露

西亞兵の逃げて居りますのが、丁度日本の里數に致しまして三十里以上である、三十里と云うと東京に居つたのが箱根まで逃げたのでは三十里にはならぬ。露西亞が理窟では勞兵會とか自由主義とか言ひましても、國の統一の主權を喪へば斯くの如きものである。國に大王なくして露西亞なり支那なりが混亂の狀態に陷りたるが如く、壽量品が無かつたならば一切經はメチャ〳〵になつて、一師團の逃亡兵を砲殺するとか、大總統が他國の公使館へ逃込んだり、或は病院へ飛込むと云ふやうに、一切經も混亂してしまう。であるから壽量品が無くなつたならば、佛敎は天理敎からも迫捲くられ、蓮門敎からもこづかれ、敎育家からは、こんな物は害物だ、佛敎は厭世的の引込主義だ、左樣なものは御免蒙むると云つて排斥される、一方基督敎からは、野蠻の宗敎であると云つて追捲くられる、迷信と比較すればモッと巧者な奴があると云つて、蓮門敎や天理敎の爲に佛敎の信徒は蠶食される。まるで支那が彼方から侵略られ、此方から侵

略られて、〳〵してしまつて、漸く借金政略でどうか斯うか餘喘を保つて居ると同じやうに、佛教も上の方は智力で馬鹿にされ、下の方は迷信に仲間外れにされて、どうか斯うか干乾にならないで坊主が油揚を食ふて居るやうなことになつてしまう、是は全く支那の現狀と同じことである。而してそれは何故であると云うと、色々事情もあるけれども、一切經の中で低いお經を頭に乘せて、或は般若波羅密多經を頭に乘せたり、大日經を頭に乘せたり、藥師經や乃至地藏經と云ふやうな、淺い狹いお經を佛教として打つて出るからいけないのである。そんな事をしないで法華經を眞先に出して、壽量品を一番先頭第一列に押立てゝ行けば宜いのである、サアどうだ、斯う云ふものが佛教ぢやと云へば、教育者も之を否認する譯には行くまい、況んや基督教や天理教や蓮門教から馬鹿にされることは無くなつてしまう。（拍手）其處が即ち日蓮聖人の言はれた通り、壽量品が一切經になければ國に大王無きが如しと云ふことである。そ

れから山河に珠なきが如しと云ふのは、山高きが故に貴からず、河大なるが故に貴からず、珠を產するが故に貴しと云ふ事から出て居る、珠が出る山と云ふものは日本には餘り無いのですから、山高きを以て貴からず、珠を出すを以て貴しと云ふことは一寸分からんけれども、まア石炭位なら分かる。何ぼ山が高くても禿山では駄目である、石炭でもドン〳〵出るとか、或は良い木材が出るやうな山ならば、低い山でも立派なものだと云ふことになる、若し本當に上等の珠が出る、ダイヤモンドが出ると云ふやうな山なら、そんなに大きくなくとも立派のものである、掘つて見ると三億圓の珠が出たとか、今日は五億圓の珠が出たと云ふやうな山ならば、例令小さい山でも價値がある譯である。それと同じく一切經に壽量品があると云ふと、不思議なことには何處を掘つても珠が出る。妙なもので壽量品があると、壽量品ばかりが有難いのではない、一切經全體が有難いものになる。人に魂があれば何處もかも活きて活躍する、魂と云

ふものは一つのやうだけれども、身體全部に滿ちて居る、是が無くなれば何處もかも死んでしまう。山に珠があるも其の通りて、全山皆是れ價値がある、一切經と云ふ大きな山に、壽量品があれば、何處を掘つても珠が出る、壽量品を取去れば禿山になつてしまうと云ふ事を言表はしたのが、山河に珠なきが如しと云ふ言葉であります。壽量品は斯くの如き意味に於てお釋迦樣がお說きになつたものてある。

(六)壽量品を知らざる者は不知恩なり

故に壽量品を知らない諸宗の學者は、如何に學問があつても、壽量品を信ぜず壽量品に顯はれたる本佛——絕對の佛樣を知らない者は、『才能ある禽獸にして人の子にはあらざるなり』と日蓮聖人は仰せられた。才能ある禽獸と云ふのは、賢い所の畜生だ、猿が人眞似をするが如きものだと云ふことてある。(笑)今の日本には斯う云ふのが澤山に出來て居る。學問はあつて偉いけれども親孝行もしない。又道德的の考もない、理窟を言はせれば中々達者てある。それと同じて一切經の方から言うと、斯う言ふ壽量品を信じない、壽量品の意義に到達なしい者は、如何なる學者であつても即ち才能ある禽獸なりと云ふことを、日蓮聖人は斷言せられたのてある。是が日蓮聖人の島流しに遇ふたり、首の座にお坐りになつた一つの原因である。當時の多くの者が偉いお方と思つて居つた諸宗の高僧、大善知識として威張つて居る者に對して、『成程お前の智慧は日月に齊しく、德は四海に彌てるけれども、併し普通の人間と違つて宗敎家として立つ以上、一番大事なお釋迦樣の敎に因つてお釋迦樣から與へられた珠數を手にし、お釋迦樣から與へられた袈裟を掛け、お釋迦樣から與へられたお經卷を手に握つて居りながら、而も本當のお釋迦樣の有難い事を忘れて、お釋迦樣を蔑ろにするのは全く不知恩の者であらう、(拍手)譬へば親に孝行せよと云ふ事を書いた孝經、其の孝經を手に握つて居りながら、孝經を以て親父の頭をポ

カン〳〵叩いたならばどうであるか、汝等は阿彌陀經が良い、大日經が良いと云つて居るが、是れ皆釋尊の說かれた經卷ではないか、然るに釋迦は吾々を救つて呉れないから駄目だとは、それは何事であるか。大日如來と云つた所が釋迦樣の德がお日樣の光りのやうに世の中を救ふと云ふことである。お日樣は世の中の闇を滅するが如くに、釋迦如來は人の心の闇を除かれる、お日樣より尙ほ尊といと云つて大日と讃歎したのである。大日如來と云ふ佛が釋尊の外にこの世の中に出た譯ではない、然るに大日如來は有難いと云ひ、釋迦は淺い佛で田舍者見たやうなものである、少し未だ迷が殘つて居つて田舍臭い所がある本當の悟を得ないものだと云つて、釋尊のお經で釋尊の頭をポカン〳〵叩いて居る。斯の如き事を爲す者に對して何と云ふ言葉を以て報ひて可なるか、まアそんな亂暴な事をしなさんなよナンと云ふ、そんな手緩い事て以て是が話の附くものかどうであるか、先づ兎に角物を言ふ前に其の者の手を振ぢ上げんけれ

ばならぬ親に孝行すべき事を書いた孝經を手に執つて父母の頭を叩く者と見てマア〳〵そんな事をするなと、そんな手ぬるい話をして居る事が出來ぬ、大聲疾呼、汝は才能ある禽獸にして人の子にあらずと眞向から喝破しなければならぬてはないか、（拍手喝采）是が日蓮聖人の師子吼である。

（七）釋尊の入滅と誕生に於ける眞意義

此の點は基督敎の人がお考へになれば直ぐ分るのであります。基督敎は如何に派が分れて居つても、基督其の人を侮る人は決して無い。又基督を通して現はれたる神樣を打捨てる者は無い。然るに佛敎はどうした間違か、間違が激げし過ぎる、お釋迦樣の敎から這入つて居りながらお釋迦樣を馬鹿にして、釋迦は迚も吾々をヨウ救ひはせぬ、彼れは一切經を說きに來た人で、お經を說いてしまつて拘尸那城跋提河の邊に於て娑羅雙林の煙となつた今は在ますぬと、彼等の思想は根本から間違つて居る、涅槃經を讀んで見れば分るのである。釋尊

入滅の座に列れる者が、何故に世尊は入滅したまふかと云ふことを聞いた時に世尊之に答へて曰はく、『我が此の肉身は入滅すれども、法身常に存す、人間を教化すべき爲に現はれたる所の我がこの肉身は、說くべき法を說き終り、濟度すべき者は濟度し終つて目的を達したが故に、安祥として最後の涅槃に入るけれども、我が本體我が法身は常に存するが故に、少しも泣くことはない、汝等肉の眼を以ては再び我れを視ることは出來ないが、信仰の眼を開きさへすれば何時にても不滅の如來は汝の前に在るなり』と、斯くの如く告げたまふたが故に、漸く其の席に列れる者は悲嘆の涙を拭ふて皆歡喜の心に變つて快樂を感じた。其の時に釋尊は胸臆を開いて、五十餘年說法された此の師子の胸臆をお開きになつて、此處から金色の光を放つて、肩から掛けて居られた物を取つて如來の全身をお現はしになつて『我れ入滅せば汝等再び我を拜することは出來ない、肉眼を以て拜する所の肉身の如來は是が最後に於て見るのである。今一た

び入滅して荼毘に附してしまへば、再び汝等金色の如來身を視ることは出來ない、汝等の心の行く儘に視よ』と仰せられて、今まで掛けて居つた袈裟も脫ぎ棄てゝ、光を放つて居る所の紫金の師子の如き胸を見せられた。『アヽ有難い事である』と云つて一會の大衆悉く快樂の心、歡喜の心に住して之を拜んだ。すると釋尊は、問ふべき事は無いか、一たび眼を瞑れば再び說くことは出來ない、汝等最後の問を爲せよ』と仰せられた、一會の大衆皆顏を見合せて、『モウ一點もお尋することは殘つて居りませぬ、已に樣々の質問は悉く解釋をせられたので、一點疑の心はございませぬ、問ふべきことはございませぬ』と申上げたので、如來は安祥として入滅したまうたのである。然るに跋提河の邊りで涅槃せられたならば、釋迦如來は何處に行かれたか分らぬとして、彼れは法を說きに來ただけで說いてしまへば夫つきりで用はないなどと言ふのは、非常な間違つた思想であります。涅槃の夕に釋迦如來が言はれた事がある、何故に淨

飯王、摩耶夫人と云ふ人間の親を持つて悉達太子と云ふ子供になつて生れたかと云へば、それは深かい子細のあることである、如來は自在の神通力があるから、來やうと思へば雲の上から現はれて來る事も出來るけれども、それではいけない事があるのである、彼處へ現はれて來た方は何處から來たか知らんけれども、雲の上から飛んで來たから佛樣かも知れぬ、佛樣ならば暑い事もないし寒い事もない、腹が空つても食いたい事もない、人間とは別者である、佛樣が夜寢て居ると云ふことは訝しいから、何時でも起きて居られんければならぬと云ふことになつて、人間と別者になつてしまう、それではいけない、此の人間の感覺、人間の情意と云ふもの——人間はどう云ふ事を苦しみ、どう云ふ事を嬉しがるか、どう云ふ事に於て人間が迷ふかと云ふことを知るに就ては、人間と同じ者になつてさうして人間の手本になるやうにしなければならぬ。譬へば泣き悲める者に向つて、『お前はそんなに泣くけれども、我は泣かぬから、我を手

本にせよ』と言つても、『佛樣は雲の上から來たのだから泣かんのが當り前である。此方は人間だから泣くのが當り前だ、俺は親もあり兄弟もあるから、親子の別れて泣き悲んで居る、佛樣は親を持たないから仕合者だ、此方は大事なお父さんが昨夕死なれたので泣いて居る、佛樣は幾ら泣くなと言つても、佛樣には親が無いから親子の情と云ふものは分らない』と云ふことになるから、人間の情意、感覺を離れたものを以ては此の人間を救ふことは出來ない。如來は自在力を有するが故に、人間の父母を取るの必要はないけれども汝等をして如來の一擧一動皆汝等の手本であると云ふことを知らしめんが爲に、我れは淨飯王摩耶夫人を父母として悉達太子として生れ、人間と同じ生活をし、人間と同じ行動を執つて、人間の堪え得られる程度に於て敎を立てゝ汝等を導いたものである。さうして此の釋迦如來に出會ふた者は、如何なる惡心の者でも善心とならぬ者はない、說法をさんざ聽いても未だどうも感心が出來ぬと云ふやうな手

ぬるい事はない。先づ釋尊の前に參詣すれば、何となしに人間が暑い時分に涼しい風に出遇つたやうな心持になる、或は十五夜の月が輝いて居れば、夫婦喧嘩をして居つた奴も共に之を見れば何となく今まで拳骨を振上げて居つた勢が拔け去るが如くに、如來の面前に至れば、鴦掘摩と云ふ百人斬の兇賊も即ち刄を捨てゝ如來の前に頭を低げるやうになり、親を殺した阿闍世王も釋尊に遇ひ奉れば今までの邪心を轉じて、無根信の信仰に入ることが出來る、鬼子母神の如き人の子を取つて喰ふ惡鬼羅刹も自分の子が可愛いから人の子を喰ふと云ふ兇惡なる女も、釋尊に遇ひ奉れば善心に歸つて、再び人の子を取つて喰ふやうなことはしなくなる、彼等は說法敎化に因つた譯ではない、一目如來を見奉れば見佛の因緣を以ての故に斯くの如く善心に立歸へるのである、この『見佛』と云ふことは、釋迦如來に限ることである。阿彌陀如來、大日如來なんと云ふは、此方で見やうと思つても向ふから出て來られないから見ることは出來ない

（笑）そこで見佛の因緣を以ての故にと云ふことが涅槃經に說いてある。如來は功德を以て結晶した身であるから、如來に遇へば如何なる惡心も何となく消えて、須彌山に近づく鳥は金色となるが如く、如來に近寄れば何時とはなしに善心となる、悲しめる者は悲みを去つて樂みを得、惡心ある者は惡心を去つて善心となる德を有つて居るものである、之を涅槃經に『見佛の因緣』と說いてある。

（八）形像舍利と實在の本佛

であるから何時までも居つて汝等に此の身を見せて置きたいけれども、それでは人間と云ふものは憍恣の心を生じて渴仰の心を生じないから、別れるのは悲しい事であるけれども、如來の此の現身は涅槃に入るのである。涅槃に入つた曉に於ては如來の舍利を留め、如來の說き置いた說法はお經となり、姿は木像となり繪像となつて永く後代まで人類の間に渴仰の中心となるであらう、而

して其の舍利を通し木像を通しお經を通して、實在不滅の如來を慕つたならば何時も汝等の前に法身不滅の如來は存するのである。即ち三寶常に世に在りて佛の大精神の現はれである、佛敎は必ず不滅である、世が如何に變轉しても、如來の說き置いたる敎は、法寶となつて永く汝等人類の間に留まる。又如何に佛弟子が腐つて如來の敎が腐り掛けても、復善い沙門が出て來て必ずや僧寶も滅びない、（拍手）我が說いた所の經卷（法寶）と我が敎を傳へる所の僧寶とは必ず永久に續くのである。而して又如來の此の身は入滅するとも、佛寶は必ず木像となり繪像となつて存する、其の裏には必ず常住不滅の活ける如來が附いて居るから、舍利を拜すれば舍利を通して實在不滅の如來を拜することが出來木像を拜し畫像を拜し、又『南無釋迦牟尼佛』と書いてある文字を拜して、汝等不滅の如來に接し得るであらう、又お經を讀む時は、釋尊在世の時には斯くの如く說法をなさつたか、今は入滅なさつて肉身の如來は無い、されど法身の如來、不滅の如來は今も此處に在ますと思つて、手に經卷を捧ぐれば、必ず法身不滅の如來の今も在ますことを信ぜよ、（拍手）斯くの如くに告げて涅槃に入られたのであるから、此の見佛の因緣と云ふことが涅槃經には盛んに說いてある、然るに彼等の宗旨の人は、釋迦如來の有難い事を打ち捨てゝ居る、今どの宗旨で釋迦如來の爲にその絕大の恩德を稱揚して居るのであるか。（拍手）基督敎は基督の德を說き、基督を通しての神の德を說いて居る。然るに佛敎徒は、やれ諸法實相であるとか、眞如がどうとか、譯の分らぬやうな煩瑣な理窟を言つて、聽いて居る者の頭を痛くするか、或は地藏樣や阿彌陀樣や觀音樣を信向して、眞實吾々の爲に救の敎を說きたまひし釋迦牟尼世尊の遺德を慕ふ者の滅つたのは、抑〻是れ何人の罪であるか、（拍手）日蓮聖人が折伏の戰は之が爲に起つたのである、壽量品を知らざる諸宗の學者は才能ある禽獸に同じと、此の主張を戴いて日蓮主義者は起たなければならぬのである。

（九）日蓮聖人末流の謬亂

諸宗の者が壽量品の本佛を忘れると云ふのは、是は已むを得ぬとしても――それでも佛敎徒で忘れるのは訝しい話であるが――其の事を慨いて起つた日蓮聖人の流を汲む者が、あらう事か釋尊を忘れて、帝釋天王あるを知つて本佛あるを知らず、鬼子母神あるを知つて本佛あるを知らぬと云ふのは、實に二重にも三重にも間違つた信向であります、（拍手）さうして日蓮聖人が首の座にお坐り下さつたのは辱けない、龍の口の御難は辱けないと言つて居つても、何の爲に御難に遇はれたのであるか、帝釋天王が有難いと云ふならば、御難も何も起りはしない、それでは本化上行菩薩の威德もない。幾ら物の筋が分らぬと云つても、是では全く何とも譬へやうの無い者である。餘まり人間の時に言うて聽かしても分らぬと、今度は愈〻閻魔法王の方から召喚が來て、『貴樣のやうな分らぬ奴は迚も如來の敎を以てはいかぬから、今度は少し手應へのある方法を以

て敎へてやる』と云ふことになつて、今度は金棒が出て來るのである、（笑）言うて聽かしても分るまいから土性骨を叩き折つてやると云ふことになつて閻魔王の處で漸く眼が醒めて、飛んでもない事が出來たと思つても、其處へ行つてはモウ遲い、性根の硬い奴で容易に分らぬ、今は分つても直ぐ忘れるから、性根の直ほるまで懲らしてやらうと云ふことになつて、五體をズタ〳〵に寸斷せられる、それで氣絕してしまうと又蘇生らせられて、さうして復た寸斷される又息を吹返すと復胴突かれて、さうして性根の這入るまで苦しい目に遇はなければならぬのである、（笑）笑い事ではない、本當の事である、それを日蓮聖人は

謗法罪の者はたとひ法華經の信者と雖も一無間二無間十百無間疑ひあるべからず。

と仰せられた。（拍手）今日日蓮宗の人は宜い加減な事を言つて欺かすけれども

――私は日蓮宗各派聯合統一の首唱者の一人でもあり、又今日小さな法論などを開くことは欲しないけれども、日蓮主義の教義學説の面倒な事は兎も角として、餘り低い迷信のやうなことは、日蓮主義から一日も早く一掃せんければならぬ。（大喝采拍手）是が手後れになつては取返しの附かぬ、申譯のない事になるであらう、各派の主張の當否と云ふやうな事は後廻しにしても、此の迷信の問題は即決裁判にしてどうしても改善を決行すべきである。今日の[illegible]宗教を離れてはどうしてもいけないと云ふ事が分つて來た、物質主義、科學[illegible]能の思想ではどうしても現在の人心を救ふことが出來ないから、今までやつて來た日本の文明に、どうしても一種の宗教的信念を加へなければならぬと云ふ時代である。而して此の信念を孰れに採るかと云うと、無論佛教は歴史的にも因縁あり、宗教としても立派であるから、宗教を選ぶならば佛教である。佛教と云へば何れの宗旨かと云つたならば、公平なる人は、禪宗でもいけない、眞

宗でも淨土宗でもいけない、眞言でも天台でもいけない、倶舍成實は論にならぬ。差當りどうしても是は日蓮主義が宜しいと云ふ所までは認められて居る。（拍手）併し日蓮主義の中に若し惡い弊害があつて、一旦之を採り用ゐた時に害毒が伴うては大變である。日蓮主義の中にはガムシャラ坊主も居るから、日蓮主義を採用したならば、秩序を紊し、敬ふべき事も敬はぬやうな亂暴な氣風が伴ひはせぬか、或は日蓮主義は正しくして强い、又敬ふべき所を敬ひ、秩序を立てる教であるかと云ふことを研究して居る。又宗教の信仰は之に因つて人が馬鹿になることがある。信仰は一方に利益があるけれども、一方に智識を盲目たらしむると云ふ通弊がある。日蓮主義を信じたら迷信とか妄信とか、譯の分らぬものが伴うて來はしないか、法華經は正しい立派な筋道の立つたお經である、日蓮聖人も其の學問から云つても、神下しのやうな事は言はない人だが、併し現在の日蓮宗を見渡すと、ドンドコ法華と稱するものがあつて太鼓を叩い

て騒ぎ廻る者がある。（拍手）彼等の有様を見ると彼等の信仰は智識を否定して居る所の最も暗愚なる狀態である。事實現在の日蓮宗の信仰の有様は、迷信の傾きが餘程強く現はれて居る、或る處に於ては狐を下すとか狸を下すとか云つて、色々な事を言つて人心を蠱惑する、正しい教として認められないやうな事がある。何處にはどう云ふ事があつた、此處には斯う云ふ事があつたと云つて裁判所の方に於ても檢事正が現在、『迷信と犯罪』と云ふやうな調査を始めて居る人もある。而して何程調べても、日蓮聖人の教の基く法華經の正しい所へ戻つたならば、唯だ感服するのみで一點非難すべき點を發見し得ない。併しながら現在の僧侶及び信者がやつて居る末の間違に至つたならば、どうしても是は許して置けないと云ふやうな事が一にして足らない。其の氣風と云ひ、やり方と云ひ、どうも高等な宗教として日本七千萬の國民の信仰を託するに足らぬと云ふやうな結論が、今や將に其處に現はれんとして居るのである。（拍手）

（一〇）日蓮主義勃興の好機運

今までのやうに一人か二人が改宗するとかせんとか云ふ手ぬるい事ではない一國の風教、一國の人心嚮導の目的に於て、宗教の必要を自覺し、健全なる宗教を何れに定むるかと云ふ選擇に方つて、將に日蓮主義に札が落ちんとして、どうしても日蓮聖人の立正安國の赤誠を認めなければならぬと云ふ時に達して現在せる末流の僧侶、俗人の信仰が低い爲に、間違つた事が多い爲に此千載一遇の好機を逸するに至つては、左樣な不心得の者は死して日蓮聖人に何の顏あつて見ゆることが出來ませうか、（拍手大喝采）今日は冗談ではない、物は考へなければならぬ、機運と云ふものは一度逸しては復來ないのである。一旦起つて來た正しき教を求むる國民の要求が一度去つて、日蓮主義は善いやうであつたけれども段々調べて見れば坊主の根性が腐つて居る、其の中には僞の分子が多い、信者は頑迷にして語るに足らぬと、事實斯うであつて見れば、何處か

教の中にも、日蓮聖人の氣風にもそんなものがあつたのでありはせぬか、教にさう云ふ事があつて、表面見れば立派のやうだけれども、潛んだる流れがあつて今日の如き腐敗したる僧俗を造つたのではないか、果して然りとすれば日蓮主義を採用することは、少なくとも躊躇しなければならぬ、再考しなければならぬと云ふことになつて、其の中に他の宗教が一度民心を襲ふたならば、間違つて居つても宗教心が一度這入つたならば、之を除き去ることは出來ないであらう、諸君、遣れば今日である。（拍手）ダラ〳〵と幾ら末法萬年の末までと云つても、何時までもグズ〳〵して居るべき時ではない。今まで屈して居つた日蓮主義が今日活動を起したのは、決して早い事ではない。日蓮聖人去つて既に六百數十年、モウ早や六百五十年遠忌が十數年の後に迫つて居る、或る地方では來年あたりから日蓮聖人の六百五十年遠忌を營まうとする寺もある。宗祖去つて六百五十年、さうして日本に於ても斯くの如く人心が非常な熱度を以て宗教の信仰を求めて居る場合であるから、今迄の小さい考を捨てゝ――水を浴びるとか狐を下すとか、狸を下すとか、そんな詰らない事の爲にしないで、今迄の穢れた考を追拂ふ爲に、素裸體になつて水を浴びて、日蓮主義者として日蓮聖人の前に愧ぢざる精神になつて、此の法を廣宣流布しなければならぬ。（拍手）人に依つては、或はそんな強い事を言つてもいかぬから、さう激しい事を言ふなと云ふ人があるかも知れぬが、さう云ふ聲があつたから今まで數年の間吾輩は默して居つた、默して居つたら改めるかと云へば、改めないではないか。であるから今日は迚もさう云ふ生ぬるい事をやつて居つては駄目だ、吾輩は何も面倒なことは言はぬ、又個人々々を攻めて細かな事は言はぬ、唯モッと眞面目な精神になれと云ふことを叫ぶのである。今は法華經が勃興すべき機運である、日蓮聖人が龍の口で御苦勞なさつた、佐渡が島で御苦勞なさつた、其の御苦勞の花が咲くのは今日である。（拍手喝采）團體を組んで龍の口に行つて、此處が御

靈蹟である、此處が首の座であると、そんな事ばかり繰返さなくても宜い、モウ分り切つて居る。日蓮聖人の辛苦艱難の花が咲いて實を結ばんとして居る、果實を收穫すべき時は今日である。（拍手）日蓮主義の僧俗とも本當の護法心に歸らなければならぬ時である。是に於て私は如何にも愉快を感ずるのであります。どうしても迷信の狀態を捨てゝ、正しき日蓮聖人の信仰に復活しなければならぬと思ひます。斯くして日蓮聖人の敎は、實に立派な、世界最高の經典に基いた敎でありますから、益〻隆盛になるに違ひないのであります。

（一一）壽量品を閑却せる大失態

是は日蓮聖人の仰しやる通り『一叩きして見よ』と云ふことがある。法華經が偉い、日蓮聖人の敎が良いと云ふことを試すには、何も難かしいことはない、唯だ一叩きして見よ――コン〳〵と叩いて見れば知れる。此のコツプにしても叩いて見れば分る――御聞きなさい、良い音がするでせう。若し龜裂が入つて居つたらビン〳〵と云ふ。日蓮聖人の敎は一叩きして見れば音が違ふ、今のやうな迷信や腐つた有樣では、叩、叩いて見てもボコ〳〵と云ふだらう、だから『一叩きして見よ、日蓮聖人の敎は實に立派なものだから』と云ふ確信に立たねばならぬ。それでは聖人の敎が何故それ程結構かと云へば、日蓮聖人の人格が立派であらせられたことも無論大切な點でありますけれども、併し日蓮聖人の人格がどれ程立派でも、基くお經が惡かつたならば駄目である、其處を考へなければならぬ。日蓮宗の人は唯だ日蓮聖人が偉い〳〵と云つてしまうから、そこで宗敎としての本據が動いて來るのである。基く所が法華經である、法華經の壽量品を提げて日蓮聖人が起たれたから偉いのである。此の壽量品を味つて見なければならぬ、壽量品は毎日讀んで居るのに、それが分らないでは駄目である。芝居でやつても『如來壽量品第十六』と云つて役者が唱へるではありませぬか、（笑）法華宗と云へば直ぐ『如來壽量品第十六』と言ふ。然るに其の壽量

品には何が説いてあると云つた時に、答へることが出來ない。之を十人に問へば十人答ふる能はず、之を百人に問へば百人答ふる能はず、之を千人、萬人、百萬人に問へども一人の答ふる者無きに至つては、既に日蓮主義は滅びたと言つても宜いてはなからうか。彼の『自我得佛來』と云つて殆んど暗誦的に無意識に讀んで居る、其のお自我偈には何が説いてある、斯う云はれるとハッと驚く、（笑）それは何事であるか。何も七面倒くさい事をゴチャ〳〵言はないでも宜い、壽量品なら壽量品には斯う云ふ事が説いてあると言へば宜い。難かしく面倒くさい事を説けば幾らでも理窟は捏ねられる、そんな理窟を言はうと思ふから言へない。壽量品に何が説いてあるか分らないて日蓮主義が立ちますか。そこてどうしても是からは壽量品を正しく了解すると云ふことが大事な點てあるのてあります。

（一二）壽量品の題號の眞意義

今日は更に進んで壽量品の先づ表題に就てお話せんければならぬのてあります。如來壽量品と云ふことはどう云ふことであるか。一體佛經と云ふものは經題は其の經一部の總標と云つて、題號を見れば大體分かるものである。そこて先づ『如來』と云ふことを考へなければならぬ、如來と云ふことも昔流に言ふと面倒な事を澤山云ふけれども、お釈迦様のことてある、即ち釈迦如來てある。他の如來を指したのてはない、『如來』とは正しく釈迦如來てある、法華經に『我』と言はれたその釈尊てある。それを何故如來と言ふかと云へば、面倒臭いことも何も言ふ必要はない、『如』と云ふのは眞如と云ふて、眞理と云ふか法性と云ふか、『其のまゝ』と云ふことてある。眞理なら眞理其のまゝ――『まま』と云ふのは拵へ物てない、本來其のまゝと云ふことてある、有のまゝなるものてありますから、之に『眞』と云ふ字を附ければ『眞如』となる、一方から謂へば妙法と云つても宜いのてあります。其の『如』が『來』と云ふのだか

ら、『來』と云ふのは人間の所に來たと云ふことである、眞如の冷たいまゝのものでなくして、其の眞如を事實に覺つた大人格者である。妙法の儘、眞如の儘汝等を救はんが爲に活きて汝等の前に來たれりと云ふが、是が如來である。

（拍手）如來の上に、尙ほ如來より偉いものがある、それは眞如だと云ふことは間違てある。其の眞如が活きて働いて居るもの、即是れ如來である。日本で謂へば日本の國體と云ふものは即ち皇室の上に働いて居る、日本の國體が『如』てあるならば、活ける　陛下は即ち此の國體の體現者なるが故に『如來』てある、然るに憲法あることを知つて天皇あるとを忘れ、天子樣は偉いけれども天子樣の上には憲法があると云ふやうな事を言ふのは、飛んでもない大間違てある、釋迦如來も有難いけれども如來樣の上には如來の戴いて居る法があると云ふやうなことを言ふけれども、法が活きて動いて居るのが即ち如來てある。其の上にモウ一つ法があればそれは如來ではない、凡夫だ。其の法に羽が生へて飛出すか、足があつて動き出したが故に、之を如來と云ふのてある、字が既に其の通り『如』が『來た』と云ふことてある、『如』が動き出したのてある。是は動き出しても動き出さなくても優劣は無いが、寧ろ動かなければ値打が少ない。壁に向つて眠つて居るのてなくして、此方を向いて活きた吾々を救ふ爲に活躍して居るのを『如來』と謂ふ。さうして此の如來は即ち釋迦如來てある、他の佛は『來』と云つても來ない、阿彌陀如來と云つても事實來ないのだから、阿彌陀不來だ。（笑）冗談でも洒落でもない、本當のことだ、如來樣だからと云つても來ないぢやないか、死んでから迎へて下さると云ふけれども、吾々は死なないから未だ遇はない。（笑）死んでから來るのは如來でない。此の『來』と云ふのは生きて居る人間の前に來りたまふと云ふことてある。死んて行く時分に迎へに來たり、幽冥世界で動いて居るのは、やはり人間の此の現實の世界より云へば『不來』てある。大日如來も大日不來てある、『フライ』にも色々あるけ

れども、大日フライ、阿彌陀フライ、皆フライだ。（笑）是は私が初めて言ふので、今までこんな事を言つた人は無い、大正六年八月十二日初めて言つたのである。併しながら此の眞理は萬世に輝くものである、私が『フライ』と云つたならば、後世人類のあらん限り、阿彌陀如來も大日如來も皆『フライ』と云ふことに改名されるであらう。（笑）釋迦如來に於て初めて此の世界に、淨飯王、摩耶夫人を親として、人類と同じ者として吾々の所にお出で下さつた。併し其のお出でになつた釋迦如來は、八十年で入滅せられたやうに見えるけれども、此の如來の壽命は一體如何なるものかと云ふことに就て、玆に『壽量』と云ふ文字が掲げてある。『壽』は命である、『量』はかると云ふことである。限りがあると云ふことではない。度量衡の量の字であつて、命をはかると云ふことである。此の人間の世に出られた釋迦如來の御壽命は、八十年で拘尸那城跋提河の邊り沙羅双林の下に入滅せられたとすれば、八十年の壽命に限つてそれきり

消えてしまうものか、此の壽命をはかつて見れば八十尺しかない、八十尺で切れた反物だと云ふ風に見るべきものか、或は表面は消えたやうに見えても、生命と云ふものは消えない、肉體は消えても生命と云ふものは無限に續いて居るものであるか、此の世にお出ましになる前を考へれば、久遠五百塵點劫の始めなき以前よりの實在の如來であらせられ、時を計つて天竺に御出ましになつて八十年の化導を終へて跋提河の邊りに入滅なさつた其の時より、又幾億萬年限りなき後に至るまで常住不滅の如來であらせられるか、此の事を秤量する——秤にかけると云ふことである。であるから壽量品に說いてある事は何であるかと云ふと、一言にして謂へば、今現に吾々の前に活きたお釋迦様が御座るか御座らぬかと云ふ問題である。肉體は入滅したまふたけれども、本當の活ける佛様が今吾々の前に實在ましますかどうであるか、と云ふと、『常に此に在つて滅せず』『近しと雖も而も見えざらしむ』斯う云ふ風にお自我偈は凡べて其の事が

説いてある。『常住此説法、常住此不滅、實在而言死、實在而言滅』――『我常に此に住して法を説く、常に此に住して滅せず、實にはあれども而も死すと言ふ、實にはあれども而も滅すと言ふ』。此の短かいお經の中に、『實在』とか『常住』とか云ふことが行列して居るではないか。其の實在常住と云ふことを忘れてしまつて、お釋迦様は死んでしまつたらどうなつたか分らないと云つて、他に信仰を移すと云ふのでは、まるでお自我偈が讀めんぢやないか。（拍手）

（一三）低級なる迷信の弊害

さうすると或は、『私はお自我偈讀まんでも陀羅尼品讀んで居ります』と云ふ人があるかも知れぬが、矢鱈に『泥履、泥履、樓醯、樓醯、多醯、多醯』と言つても何にもならぬ。（笑）あゝ云ふ文句を唯だ無闇やたらに變な調子を附けて、所謂だらに聲を揚げて、『安爾、曼爾、摩禰、摩々禰』と讀んだ所で何になりますか。字の見える人ならば陀羅尼品を讀んで御覽なさい、彼處で鬼子母神がどう言つて居るか。『寧ろ我が頭の上に上るとも法師を惱ますこと莫れ』と言つたのではないか、『自分は法華經を後代に説かうと云つても、學問もなし智慧も無い。此の法華經の法を説く法師は別にある、其の法師が法を説かれる時分に反對をする者は、人間ばかりではない、眼に見えない惡魔の輩も亦法華經の行者を惱ますとするかも知れない。或は夜叉、羅刹、富單那、吉蔗、鳩槃茶餓鬼と云ふやうな（先づ日本の言葉で言へばお化と云ふやうな）惡魔が、蔭からして正法の導師を災せんとする者があらう、それは巡査も捕へられないし、信者も知らない、其の場合には、私は詰らぬ者だけれども、今私が申上げる此の樓醯々々多醯々々と云ふことを言つてさへ戴けば、さう云ふ惡魔は怖がつて決して此處へは來ない、』さうして又惡魔に對して鬼子母神が言ふには、『お前達此の坊さんを憎いと思つたならば、坊さんに手を着けるな、私の頭の上に乘つて地團太踏んでも、土足で此の鬼子母神の頭を踏付けても怒りはせぬから、決

して法師を惱ますこと莫れ。後代に法華經を弘めんとする法師、沙門を惱ますならば其の分には捨て置かない、必ずや汝等惡魔を取つて引裂いて、柘榴が割れて地に落つるが如き有樣にならしむるが宜いが』斯う云ふことを鬼子母神が言つて、さうして彼の呪を說いたのであつて、唯だ無闇やたらに破落戸が喧嘩をするやうなことを言つたのではない。寧ろ我が頭に上るとも法師を惱ますこと莫れ――寧上我頭上莫惱於法師と云ふことを告げたのであります。然るに此の鬼子母神を有難がる者が、一人も法を說かなくなつて居るのは何事であるか即ち日蓮聖人の言はれた通り、

徒に遊戯雜談のみして明かし暮さん者は法師の皮を着たる畜生なり。法師の名を借て世を渡り身を養ふと雖も法師となる義は一もなし。法師と云ふ名字をぬすめる盜人なり。（松野殿御返事一五三〇）

『法の師』とは書いても、法を說かぬから法の師ではないぢやないか、『法の師と云ふ名を盜む盜人なり、法師の皮を着たる畜生なり」と云ふことになつては何ぼ「樓醯々々多醯々々」と云つても、鬼子母神は肯いて呉れはしない。さう云ふ者に向つては「お前は何も樓醯々々多醯々々と言はなくとも、法師とさへなればそれで宜いのだ」と鬼子母神は答へるであらう。（拍手）

斯う云ふ工合に物は筋を分けて能くお經を見ないと云ふと、今日から以後は教育ある人が佛教の研究をし、日蓮主義の研究をして呉れるのである。今迄のやうな西も東も分らぬやうな、低級な無智識な者がワイ〳〵言ふて、少々位數が多いからと云つて、それを以て日蓮主義が勃興して居ると云ふことは出來ない。（拍手）ワイ〳〵的の發達を計るならばモッと柄を落してしまつて、法華經も御妙判も皆拔にして、豆腐屋の婆さんでも擔いで、『一列濟まして甘露臺、豆腐が煮えたらどうぢやいな』（大笑）是で宜い、立派なお經を以て宗旨を立てるやうな事は考へないで宜い。苟も如來壽量品を奉戴する者が、「豆腐が煮ネ

たらどうぢやいな」では行くまいぢやないか。

（一四）壽量品に對する正明なる信解

そこで其の如來が一つちやんと立ちさへすれば宜い、國家で云へば皇室の尊嚴が明かになれば一國の基礎は其處に定まるのである、宇宙の中に於ては絶對大人格者が定まれば、其處に於て宗教の生命が立つのである。即ち基督教で謂へば、基督及び神其のものが、如何なる者からも打摧かれない、絶對の權威として基督教の神を信じて居れば、基督教には生命がある。佛教では、佛教に立てる本佛が如何なる思想からも打碎かれない。絶對の靈光を放つて居れば、佛教には生命があるのである。國に例すれば王樣が殺されるやうになつたり、他の者から追捲られることになれば則ち其の國家の基礎が動いたのである。佛教では是が本佛であると云つて壽量品に顯本されたる釋迦如來が、他の思想を以て追捲られゝば、佛教と云ふものは根本より動搖したものである。日蓮主義者

は佛教の復活を以て任じ、本化上行菩薩が出て其の本佛を光顯せられたる流に居りながら、グジャ〳〵下らない學説を揑ね廻し。又一般の信仰は低級なる迷信になつて、學者は暗愚にして此の根本を忘れ、信者は蒙昧にして此の高遠なる宗教を逸すると云ふことは、如何にもお祖師樣に對して濟まぬことであります。（拍手喝采）何も面倒なことはない、日本で　天子樣が有難いと云ふことは誰も知つて居る、法華經の方では壽量品に現はれたる如來を忘れてはならぬのである。我れ佛を得てより以來、經たる所の諸〳〵の劫數無量百千萬億載阿僧祇なり、汝等が苦みの海に浮きつ沈みつして居るから、我れは汝等を救はんが爲の故に、應に度すべき所に隨つて爲に種々の法を説く、毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得せしめんと片時も休まぬものである。であるから本化上行菩薩を汝等の爲に日本國へ遣はしたのであると云ふことを、判きり説いてあるのである。然るに日蓮聖人が有

難いと云つて本佛を忘れるのは、如何にも愚な話であります。隨分それは屁理屈を捏ねてゴヂャ〳〵言ひますけれども、そんな事は何でもないことである。人間の頭腦は健全でなければいけないグナラ〳〵下らぬ事を言つて居つては駄目である、少しは人間眞面目に返らんければならぬ。生命に換へても護らなければならぬ宗教の信仰、其の信仰に依つて一切の事柄の根本が立つのである。人間に生まれた甲斐も立ち、國に盡すことも是で出來る、子孫に傳へる己の生命も此處に在る、此の全宇宙に唯一の寶は己の信仰である。其の清き信仰を定めるのに、フラリ〳〵譯の分らぬことを振廻すのは、何事であるか。頭腦が逆上せて居るならば氷でスッカリ冷やして、是なら我が全力の及ばん限り、自分の智慧と自分の分別と誠心と、全身の力を籠めて、是だッと云ふ所にチャーンと定めなければならぬ。基督教などにグズ〳〵言はれて、『成程ぢや、ハハーン』と言ふやうな、そんな手落のあることてはいかぬ。其處まで確乎と定まつて居れば

刀で斬つても宜しい、十分鍛へ上げて決心したことであるから、今更考へ直ほす所は御座らぬ、首を斬るならば仕方がないからお斬りなさいと云ふ所に、ちやんと行くのである。吾々の命なんと云ふものは果敢ないものである。縱令此處で頸は斬られないでも、何時不意の事が起つて、電車が衝突して潰されないとも言へない、或は急病が起つて斃れないとも限らない。此の最高の信仰と倶に行くならば、他の物は何もなくとも宜しい、己の精神の信仰を喪ひさへしなければ、我が所有の全體は此の信仰の中に在るのである。（拍手）それ程有難いものてありますから、モウ少し本氣てやつて戴きたい。

是から壽量品の内容に入つてお話する順序である、今日は壽量品の内容に入つて申述ぶる所存で豫定をして居りました、壽量品全體を四回と云ふ豫定で、長行を二回、自我偈全文を二回と云ふ考でありましたが今日は少しメートルを揚げ過ぎて（笑）横の方へ行つてしまつたのであります。併し是は悪いことてな。

いのであります。細かい理窟をゴジャ〳〵と此の暑いのに覺えても仕方がない、ウント眞面目になつて、如來壽量品に於て本佛釋尊の常住不滅――此の壽量品が無ければ人に魂なきが如く、一切經は死んでしまうと云ふことを考へて、其の壽量品の精神は何處に在るかと云ふことを、一世一代でお聽きになればそれで宜い。唯だ演說を何遍でもフラリ〳〵聽きさへすれば宜いと云ふのではない、之を聽き終りさへしたならば――壽量品を聽いた者は皆悉く歡喜の心を起して、無生法忍に達するのでありますから、諸君は此の四回なり五回なりの演說を眞面目に聽けばそれで事が足りると云ふ考を以て、どうぞお聽きを願ひたいのであります。

今日はお經の本文に入りませぬでしたけれども、大分時間も經ちましたやうですから、是だけにして措きまして、次回には此の埋合せに直ちに內容に入つてお話することに致します。

南無妙法蓮華經

(一五)壽量品の大體の組織

前回には如來壽量品に就て、その來意と題號に就てお話を申して置いたのであります。少し暑い爲に脫線を致しまして、阿彌陀如來が『フライ』になつたり色々變つた事になりましたが、併し暑い時分は餘り文字章句に關はらないのも宜いと云ふことでありました。併し今晩は少しは經文に就てお話をしませぬければ、今晩復脫線をするやうでは抗議が起るかも知れませぬで、先づ最初に經文のお話を致しまして、終りには少々脫線しても宜からうと思ひます。(喝采)

此の壽量品は長行と偈頌と申しまして、上の方と下の方と二つに分れて居ります。長行と云ふのはズッと說明されて居る所の經文であります、偈と申しますのは、其の說明し終つた事を、再び其の意味合を取つて歌ふやうに說いてあるのであります。議論をして居ります間は宗敎信仰の下拵へであります、了解

が行つて信仰が定りますれば、議論ではありませぬ、其處に信仰があり、其處に喜悅があり、其處に力がある。即ち好い心持になつてその意味合を歌ふと云ふやうな事になつて參るのであります。そこでお自我偈と申しますのは、モウ理窟などではないのであります。何も彼も分つた者が好い心持になつて、さうしてその意味を心持好く歌ふて居りますのが。自我偈であります。故にあれは——今日の所謂讃美歌でありますから、節を附けて美い聲で歌ふのが宜いのでありまして、濁つたやうな聲で蛙が鳴くやうな風にやつたり、或は陀羅尼聲などと云つて、嘶嗄れた聲でお經を讀みますけれども、あれは宜くないのであります。清亮と云ひまして、極く清い涼しい、美い聲でお經は讀まんならぬものであります。法華の信者と云ひますれば大きな珠數を襷に掛けてグワ〳〵〳〵と云つて變なあかがねのやうな聲を出すと云ふ風に考へて居るのは間違であります。殊に此の壽量品あたりは美い聲で讀むべきお經であります。それてその

長行と云ふのは上の方でありまして、「而說偈言、自我得佛來」から以下が偈頌と申しまして、所謂お自我偈と云ふのであります。

此の長行の中をば、大きく分けると大體先づ二つになるのであります。一番初めが誠信と云ふ科段、第二が法說と云ふ科段であります、モウ一つに加へますれば譬說と云ふのが起つて參るのでありますが、大體は誠信と法說であります。

(一六)如來誠諦の誠信

誠信と云ふのは最初の——印刷物では第一の符號が即ちそれでありまして、『信ぜよと誠む』と云ふことを、詰り信心せよと云ふことを佛が誠められたことであります。是から說く壽量品は、如來の本懷を說くのである、今まで四十餘年樣々のお經を說いて來たが、併し未だ一番大事のことを說いて居らない、其の一番大事な事柄と云ふのは何であるか、それを是から說くのであるからし

て、是から説くことは一生懸命信心せんければならぬと云つて『如來の誡諦の語を信解すべし』と云ふことを三度繰返して仰せられた、三度と云ふことは最も丁寧に誡められたことてあります。そこて大衆と云ふ聽者の方に於ては、彌勒菩薩が代表者となつて多勢の者の考を代表致しまして、又三度佛に申上げる

『我等當に佛の語を信受したてまつるべし』唯だ願くば之を説きたまへ――

唯願既之』と云ふことを三度お願したのてあります。恰度諸君が斯うしてお集りになつて居るが如くにして、どうしても壽量品の一大事が聽きたいものであると云ふ事から、三度お願をした、故に之を三度誡め三度請ふ――三誡三請と云ふのであります。それから重請重誡と云つて、更に重ねてお願をして、更に重ねて、誡められると云ふ順序になつて居るのであります。即ち『三たび白し已りて復言さく、唯だ願くば之を説きたまへ』と第四回目に繰返してお願をした。そこて佛様の方からは、又モウ一遍繰返して誡められるのが、印刷物の第一の符號に現はれて居る所でありまして、即ち

一、爾の時に世尊、諸の菩薩の三たび請じて止まざることを知ろしめして、之に告げて言はく、汝等諦に聽け。

と更にお誡めになりまして、是から説く事は本氣て聽かなければならぬと云ふことを申されるのであります。法華經の初め方便品の時にも、三たび止め三たびお願ひしたと云ふことがありますから、そこて之を加へると云ふと、法華經の大事のことに就ては都合七遍誡められて、七遍お願ひした譯てあります、どうぞ説いて下さいと云ふことを七遍申上げる程に鄭重な譯である。是は其の丁寧な所に意味があるのてありまして、唯だお經と云ふものは濫にさう云ふ事を煩はしく書くものてはない。天台智者大師が之を解釋して、何故斯くの如く慇懃鄭重なるや――誡められる方も四たびに及び、お願ひする方も四たびに及んて繰返されると云ふのは、どう云ふ譯てあるかと云ふと、それは『佛智深きに

至るが故に』――佛様の御智慧の一番深い所から出て來る説法であつて、さうしてそれが佛様の本懷と云ふ、心の奥の眞實なる所を説かれるのであるからして、斯の如く慇懃鄭重にされたものであると云つてあります。日蓮聖人は之を當體義鈔と云ふ御遺文の中に『誠諦の前』と言はれた。それは『如來の誠諦の語を信解すべし』と云ふことがある――誠諦と云ふことは如來のまこと、明かなる所であります、今説かれる壽量品が如來の眞實を説かれるとするならば、それより前は未だ眞實ならざる所が殘つて居たので、寶塔品に於て多寶如來が、『皆是眞實』と稱歎せられたけれども――それは一應さう言はれたけれども、壽量品の深い意味から考へれば、法華經の中に於ても未だ眞實を説き盡されて居らなかつたものである、故に壽量品より以前は未顯眞實と云ふ文なりと日蓮聖人は解釋せられた、今此に至つて繰返して誠諦の語を信解すべし、誠諦の語を信解すべしと言はれるのは、此の壽量品より前は未だ眞實を顯はさぬと云ふこ

となりと、是は當體義鈔に明文のあることであります。何れに致しましても此の壽量品の初めに丁寧にお誡めになつたと云ふことに就ては、深い意味のある事を承知しなければならぬのであります。

(一七)三世十方周遍利益

それから此の誡が濟みまして次に現はれて參りますことは、即ち法説と云ひまして、法に依つてお説きになるのであります。此の法説の中が色々に分れて參りますが、殊に大事な點は三世益物と申す法義であります。三世と申しますれば始めなき過去と、現在と、終りなき未來を指して謂ふのであります。此の始めなき時より今日及び終りなき未來に至る三世に物を益する――物と云ふのは人間でも何でも一切を容れたものでありまして、益するとは利益するので一切衆生を救ふことである、即ち今壽量品に顯はれる本佛は、三世に通じて一切の衆生を利益せられるものであると云ふことを説いてあるのであります。今

日佛教を開かれた――天竺に出て一切經をお說きになつた時だけが佛樣の御働きでなくして、世々番々と云ふて、何時の時代も遠い過去から幾度でも衆生を濟度されて居る佛である、今後も亦永久に無數に出現し利益せられると云ふことであります。之を時間で申しますから三世益物と申しますが、横に申しますれば之を十方益物と云ふ、東西南北四維上下、有ゆる世界に於ても、常に衆生を利益すると云ふ、それで之を三世十方周遍利益と云ふのであります。それは印刷物の第三の所に『是より來た』と說いてあるのは即ち時間であります、始めなき以前から今日に至るまで常に說法教化する、又其の次の『亦餘處の百千萬億那由陀阿僧祇の國に於ても衆生を導利す』と云ふのは十方世界を擧げて處を示すのであります。詰り何時の時代でも又何れの處でも衆生を導利すると云ふのである。恰度雨がザーッと降つて居るやうに、上も下も、右も左も、有ゆる廣い範圍に亙つて居る、其の大活動を三世十方周遍利益と申しまして、縱に三世に高く、横に十方に遍ねしと云ふ、もう餘す處は無いのであります、西の方には阿彌陀樣が陣取つて居るとか、東の方には藥師如來が陣取つて居ると思ふやうな思想は、皆方便の說てある、それは此の壽量品の中に段々現はれて參るのであります。兎に角此の三世益物と云ふことを本當に了解しなければならぬのでありますが、それを段々經文に就てお話をして行く次第であります。

(一八)本佛釋尊の顯本

第二の符號の下は最も大切なる經文で、即ち釋尊の顯本の文と云ふ、顯本と云へば本を顯はすと云ふことであります。今天竺に出られた釋迦如來、法を說いて居られる釋迦如來は、此處に現はれて居る佛としても偉い方でありますけれども、更に其の本體其の內面は如何に偉大なるものであるかと云ふことを顯はすのであります。お釋迦樣が人間に出て爲さつた事よりもつと偉い事をなさつたならば、吾々と關係が斷れてしまひます、もつと眞理の深い難かしい意味

合を細かく説かれたならば、此方が聽き分けが附かなくなる、又もつと偉い働きをせられた時には、此方がよう嚙み分けることが出來なくなる、體でも大きく出られたならば――奈良の大佛樣でも相當大きいのでありますけれども、非常に大きな體に出られたならば、上の方のお顏を見ても此方の眼が屆かぬやうになつてしまう。そこで一丈六尺と云へば隨分大きいのでありますけれども、先づ人間相當に出られたのである。さうして說法せられた經典は、兎に角日本に今殘つて居るのでも數千卷の經文となつて居るが、其中にある事柄は有ゆる方面を盡して居る、あれ以上廣く深くなつた時には、此方の方で御免蒙らんければならぬ。もう張切つて一パイ人間の智慧が伸びても不足の言へない程度だけには、既に御現はしなさつたのである。併し尙ほ其の內面を言へば、量るべからざる宏大な智慧があり、慈悲があり、活動があり、何とも言ひ樣のない尊い方だと云ふことを顯はすのが、顯本と云ふことである。天竺に現はれて御働

きになつただけでもが立派だけれども、更に其の內面の偉大なることを顯はすと云ふのである。丁度將棋で云へば成飛車と云ふやうなものである。此の間此處に參詣して居られる老人が來て、『あなたは將棋を指されるか、能く演說に將棋の話が出ますが』と云ふことであります。私は大して將棋は指さぬけれども、飛車が成る位のことは知つて居る。（笑）飛車と云ふ駒は成らぬ前から豪いてせう、（全然將棋を少しも知らぬ人には分らぬけれども）併し成らぬ前から豪い駒が、敵陣へ躍り込んで引繰かへると云ふと、更に恐るべきものになる、其の威風四邊を拂ふやうな勢であり、『あッ成つたか』と相手が吃驚するやうな豪い勢である。お釋迦樣は成らない前、印度に現はれて居る時だけでも、人間の歷史あつて以來東西古今を通じて卓越して居る大偉人である、併しそれが壽量品に於て飛車がピューッと成つた。（笑）それが顯本と云ふ事なんである。其の事を今此處で仰しやるのである。

(一九)本佛の妙體妙用

如來の秘密神通の力を、(如來秘密神通之力)

此の八字が壽量品の心髓である、是は壽量品の演題見たやうなものである、如來壽量品と云ふのは後で附けた題號で、お釈迦様が、それぢや汝等諦に聽けと云つて、演題を其處へ張らうと云ふ所である、それは演題とは仰しやらぬ字では書かぬけれども、『汝等諦に聽かんければならぬぞ、如來の秘密神通の力を』と仰しやつた。此の如來秘密神通之力と云ふことが、詳しく説けば壽量品全體であるし、更に擴げれば一切經全部になるのであります。(拍手)併しさう擴げては分らぬから、先づ一寸其の意味を話さんければならぬ。さうすると天台智者大師の一通りの解釈では、『三身即一身なるを名けて秘となす、一身即三身なるを名けて密となす』斯う仰しやつた。併し是ては何だか分らないから一通りお話すると、三身即一身と云ふことは、佛様の觀方が三通りある、其の

三通りと云ふのは――斯うなつて來るとソロ〳〵暑くなつて來る譯だけれども――法身、報身、應身と云ふのである。法身と云ふのは法の身と書いてあつて自然の眞理其の儘であります。佛様とは謂ふけれども、どつちかと云へば哲學のやうなものである、それが佛様になり掛けて居るやうなものである。譬へて言ふと、水晶が結晶して石の中からピョッと尖つて出て來る、水晶の玉ではないけれども、其の端が出て來る、段々冬になつて結晶するとそれが大きくなつて來る、それを採つて來て磨くと水晶の玉になる。法身と云ふのは水晶が山で以て一寸尖つて出て來て居るやうなもので、未だスッカリ玉にはなつて居ないけれども、後には玉になるべきものだと云ふやうな處である。だから佛様もさう見ると哲學の眞理も同じものである。其の眞理の中からピョッと出て來ると終ひにそれが佛様になつて行くのである、其の眞理のまゝ、それが人格化せんとする所が法身である。それから報身と云ふのはそれが人格に移つて、智慧が

スッカリ完備して居る佛様を謂ふのである。であるから之を姑く分ければ、三身は理、智、悲と說くことが出來る。即ち法身とは眞理の佛、報身とは智慧の佛、應身とは慈悲――大慈大悲を以て迷へる衆生を救ふが爲に、優しい手を下して濟度しやうとなさる、其の働きを應身如來と謂ふのである。所が之を下手に觀ると云ふと、大日如來は法身だ、阿彌陀如來は報身だ、お釋迦様は應身だ、斯う云ふ工合に之を切つて見るのである、斯う云ふ隔てを附けるのを隔歷の三身と云ふ、隔歷と云ふことは隔りがあつて、三身が別々にバラ〳〵になるのを擊つた言葉である。眞宗などでは之を眞理の佛、智慧の佛、慈悲の佛と分けて、阿彌陀様は報身如來だ、お釋迦様は應身如來だと云ふけれども、それは不徹底の見解である。是は唯だ一つの佛様の觀方を眞理の側から見、智慧の側から見、慈悲の側から見るだけで、佛それ自身は一つの圓い圓滿な如來であるから、此の三身が別々でない、三身即一身なるを名けて秘となすと釋されたのである。（拍手）そんな大日とか阿彌陀とか、別々になつて居ると云ふことでは秘でない。秘と云ふのは秘妙と云ふことで、秘と云ふと分らぬけれども、是は妙も同じことである。妙の裏は麤と云ふて、粗末と云ふことである。そこで三身を別々に考へるのは粗末な頭腦だナーと云ふことになる。（笑）それから密と云ふのはどうかと云ふと、其の三身一體なる所のものが、一身即三身なるを名けて密となす――一身だと云ふから一つのものかと思ふけれども、一身であつてさうして是が三方面に眺められるもの、是れ即ち一身即三身である。一つのお釋迦様ぢやと云つても、眞理もあり、智慧もあり、慈悲もあるのである、他の佛などを借りて來ないでも、其の儘に一身即三身なるを名けて密となす。密と云ふ字はどうかと云ふと、深密と云つて深いと云ふ意義である。そこで一つの佛様に智慧も慈悲も眞理もあると云ふことをヨウ觀ないで、唯だ智慧だけの佛、慈悲だけの佛として見るのは、深いと云ふことの裏だから淺いと云ふこと

で、さう云ふ觀方をする者は考が淺薄であると云ふことである。（笑）まア字だけ講釋すればさうである。併し此の如來は誰を指したかと云へば、他の宗旨では之を指して阿彌陀如來とか、何とか言ふけれども、是はお釋迦樣が自分を指して說かれて居るので、釋尊が自身を指して、如來秘密神通之力と言はれて居るのである。阿彌陀樣と云ふは釋尊の說法の時にさう云ふことを話されただけであつて、さう云ふ事を或る婦人に話をしたけれども、又後のお經で、あゝ云ふ事は極意でない、更にモッと好い敎があると云ふことになれば、阿彌陀樣なんと云ふものは話の上で消えてしまう。（笑）有ると云へばある、無いと云へばない、出ても來なければ働きもしない、此の前言ふた通り『不來』だ。（笑）是は惡口でも何でもない、其の通りである。事實親切のあつた佛樣はお釋迦樣だ、現に此の通りお經を說き、吾々の爲に救の手を垂れられて居るではないか、應身と云ふて之を貶するのは抑〻間違つた事である。是が應同して出て來て下さ

らなければ我等は救はれないのである。人の世に出た佛は詰らぬと弘法大師は言つたけれども、それは一種の謬見である。（拍手）此の眼前に現はれて法を說かるゝお釋迦樣は、悉達太子から成道を遂げたので、偉い方だけれども、併し未だケチを附ける奴もあつたが、此の如來の秘密に這入れば三身即一身、一身即三身、成り飛車となられたら、最早何とも貶することは出來ぬ。十方の諸佛幾ら澤山あらうとも、此の釋迦如來の本佛の働きに外ならぬ。（拍手）それが神通之力と云ふのである、神通の力と云ふのは何かと云へば、是は働き出す——斯う云ふ一身即三身の如來が活動を始めると云ふとてある。神通とは何ぞと云へば、幹用自在と天台大師も釋された、幹と云ふのは大きいと云ふ字てある、樹の幹だから、枝だの葉に比べて大きいと云ふ意味で、幹と云ふ字を用ゐてある。枝の作用や葉の働きてはなくて、大きな佛の根本の働き、幹の働きと云ふことてある、用は即ち『はたらき』と云ふことてある。そこで阿彌陀樣とかお

地藏樣は、枝とか葉とかに當る働きに過ぎないのである。此の一身即三身の本佛が活躍を始めると云ふことが幹用である、さうしてそれは自由自在で、實に何とも言ひやうのないことである。そんならそれはどんなに働きますかと云ふことになつて、三世益物の其の働き工合を是からお說きになる、こんなものだと云ふ事が段々現はれて參るのであります。で一通りは此の如來秘密と云ふことを體と云ひます、體は即ち佛樣の本體であります、それから神通之力と云ふのを用――即ち『はたらき』と謂つて、體用と云ふことになるのであります。で此の佛樣の本體と佛樣の本當の働きとを一貫して、如來壽量品の大事な所が知れる譯なんである、世に出られたお釋迦樣の本當の本體と、本當の働きと云ふもの、謂所絕對的に觀たる所の釋尊と云ふものが領解さるれば、それが如來の秘密神通の力である。

（二〇）文外の曲解邪說

であるから法華宗の中でも、壽量品を解釋して文の底に入つて居るとか、色色言ふけれども、此の現身說法の釋迦如來を離れてしまつて他の方で探すと云ふことでは、どうしても標題の如來壽量品と云ふことに合はない。色々文の底とか文の上とか云ふことがあるが、底と云ふものは其の文の底なんだから、是の經文から離れてはいけない、文の横ではない。横に外れてしまうならばそれは文の横で、底ではない。文の横と云ふことは義理に無理がある、それは曲解と云ふことになる。文の底と云ふのは其の文に含まれて居る深い義理でなければならぬ、文底だ〳〵と云つても壽量品の横の事を言ふならば、それはやはり壽量品ではない、壽量品の横である。大きな家がありまして、其の隣に住んで居りますと云ふやうな話だ、（笑）であるからやはり此の文を傳ふて其の意味を取らなければならぬ。文と義理と意と云ふものは離れてはならぬ、猿を離れて膽を求むること莫れと云ふことがある。是は面白い話で、お經に出て居る事で

ありますが、昔虬蛇と云ふものがあつた、虬蛇と云ふのは蛇と云ふ字も書いてある、或は龍と云つても宜い、どんな形のものかと云ふと、蜥蜴に似て居るもので、長さ四五尺もあると云ふ、さう云ふ虬蛇と云ふものが海中に棲んで居た、日本では龍とも言ひますし、色々名前はありますけれども、さう云ふものが居つた。所が其の虬蛇の女房が姙娠をして居つて、さうして少し病氣に罹つたが『どうか猿の膽を取つて來て食はして呉れ、猿の膽を食へば妾の病氣は癒るから』と言つて頼んだ、そこで女房可愛がりの虬蛇が、猿の膽を取りに陸岸近く寄つた、猿は木の上に居るけれども、騙さんければ下に降りて來ないから、そこで猿に向つて言つた、『お前そんな所に居つて、大して旨い物も無いやうだ、此の海の向ふに島があつて其處には人も住んで居らぬし木の實が澤山にある、又色々な旨い物が一パイ鈴なりである、俺は海の中に棲息して居つて、そんな物は食はないし、誰も食ふ者が無い、どうだお前行つて見ないか』『さうか、それぢや濟まんけれども連れて行つて來れ』『宜し、俺の背中へ乘れ、連れて行つてやらう』と云ふので、猿を連れて段々海の眞中に來た。もと〳〵欺いて來たのだから、海の中に行くと『實はお前を騙して連れて來たけれども、そんな島がある譯ではない、俺の女房が猿の膽が欲しいと云ふから、お前の膽を出して呉れ、モウ此處は海の眞中だから、貴樣が幾ら飛でも跳ねても仕樣がない、サア膽を出せ』と云ふ談判を始めた。所が猿は賢い奴だかち『さうか、さう云ふ事なら早く言つて呉れゝば宜かつた、私は木の實が澤山あると云ふからそれを食ひに來たので、膽をツイ忘れてあの今まで居つた木の上に置いて來てしまつた、だからどうしても膽が要ると云ふならば、モウ一遍彼處へ連れて行つて呉れゝば、膽を取つて來て上げやう、氣の毒だがモウ一遍連れて行つて呉れ』『サウか、膽を忘れて來たなら仕方がない』と云つて、それから又虬蛇が其の猿を乘せて、陸岸近く運んで來た。さうすると猿は急いで木の上へ飛上つて、さう

して嘲つて曰く『汝猿を離れて膽を求むること莫れ』と言つたと云ふ話がある、（笑）そこで壽量品の奥に深い所がある、深い所があると云つても、猿の膽は猿の内に在る、壽量品の深い所は壽量品の内に在るのだ。（喝采）壽量品から離れてしまつて勝手な事を言ふて、是が深い所だ〳〵と言ふのは、それは曲解邪說と云ふものである。（喝采）

（二一）新田義貞の兜と壽量品

そこで此の如來秘密神通之力の八字は、非常に尊いことでありますから、新田義貞は兜の内に此の八字を書いて居つたのであります。新田義貞は御承知の通り南朝の忠臣であります、楠公と相並んで――寧ろ彼の當時に於ては楠公より偉い人であります、北條を倒すまでは、新田義貞があつた爲に北條高時を倒すことが出來たのであります、併し後に御褒美に勾當内侍と云ふ美人を貰つたが爲に、歷史の傳ふる所に據れば、足利尊氏が叛した時分に、義貞は此の美人の爲にチトぐず附いた、そんなに急いで行かないでも宜いでせうと云つて美人が止めた爲に、ツイ出陣にぐず附いて、それが大變な影響を與へて、終ひに楠公も湊川で戰死をしなければならぬことになつたと云ふけれども、偉い人であります。此の新田義貞の冠つて居つた兜が、越前の福井の藤島神社と云ふのに遺つて居るが、それに如來秘密神通之力と云ふ八字が書いてある、是は有名な事であります。此の文は非常に良いお經文でありますから、新田義貞が是ほど大事にしたのであります。

（二二）一切經中最大の聖語

それから此の八字は他の場合に於きましては、例へば方便品に諸法實相と云ふことが說いてある、又其の他にも佛敎に良い經文が澤山ありますけれども、色々良い經文の中に於ても、此の如來秘密神通之力と云ふ八字が出ますれば、是が最高の權威を有つて居るのであります。諸法の實相がどうとか、吾々の佛

性がどうとか言つて居る間は、未だ宗教としては下拵の所であります。それ等は孰れも結構なことであるけれども、幾ら吾々の佛性が尊とからうとも、宇宙の眞理が尊とからうとも、偉大なる人格を有つて居る如來が吾々を救ふと云ふ、此の力を現はして來ない時には、宗教と云ふものは發生しない。（拍手）宗教に據らずしてズッと自分が偉いから、自分で眞理を直ぐ捉へられる、他人の厄介にならずに自分でポンと胸を叩けば、佛性が飛んで出ると云ふやうな偉い人は別だけれども、さうは行かない。宗教に據ると云ふ限りに於ては、又佛教が宗教である限りに於ては、此の如來の絶對價値を説明しなければ、一切經は反古になつてしまうのであります。（拍手）是は此の前にも申しました通り、國家の組織に就ては色々大事なことがあります。即ち領土――國の版圖と云ふものが無ければ國家はない譯であるから、領土が無ければならぬ、それから人民が無ければならぬから、領土、人民と云ふものは國家を組立てる上の根本であ

る、然れども更に大事なものは、之を統轄する所の主權が無ければならぬ。國と云ふものは何で成立つて居るかと云へば、領土、人民、主權の三つで成立つて居ると云ふことは、諸君が學問して皆聽いて居られることであらう。日本國ならば日本國の版圖があつて、其處に人民があり、其の上に主權者がある、諸法實相と云ふ宇宙を宗教で説明するのは、丁度國家で謂へば領土を説明するやうなものである。佛性論を説明するのは、其の人民の特性――大和民族の大和魂を説明するやうなものである。領土と人民の大和魂とがあつても、此の日本に於ける主權者――皇統一系の天皇が在らせられなかつた時に於ては、日本と云ふものは頭が無いことになつてしまう。そこで諸法實相と云ふ宇宙に關する事を説いて居るのは、丁度國家に於ける領土の説明であり、開佛知見と説くのは人民の説明である、今此の如來壽量品に於て如來秘密神通之力と云ふことを説いたのは、我國に於ける　皇室の絶對權威を説いたと同じ事なんである。

是が日本の國家に無かつたならば、さつぱり日本の特色が分らぬ如く、佛教の中に如來の絶對權威を說かんければ魂が無いと日蓮聖人は言はれたのである、（拍手）そこで此の八字が一番に大切な事になつて來るのでありますが、それを演題として置いて、それから說明されるのである。

（二二）惑者、壽量品を解せず

一切世間の天人及び阿修羅は。

と云つて、其處に法を聽いて居る人を擧げられた。菩薩も多く居つたけれども此の如來の絶對を知らぬ限りに於ては、汝等は菩薩と言ふことは暫く許さぬ、と云ふので、彌勒菩薩も居るけれども、『天人及び阿修羅は』と貶されたものであると昔から說明されて居る。天人及び阿修羅と云ふのは、是は六道（三惡道三善道）の中の三善道である、下の方の三惡道と云ふのは地獄、餓鬼、畜生、上の方に行けば天上、人間、阿修羅であります、そこで天人及び阿修羅は三善道であります。如來の絶對を知らんければ本當の菩薩ではない、日本で謂へば皇室の尊嚴を理解しない國民は、如何に學者であらうが金持であらうが、一人前の本當の日本人でない。（拍手）汝等日本の臣民よと云ふ光榮は荷はれないのである。ヒコ〳〵動いて居る人見たやうな者よと云ふことが、此の天人及び阿修羅はと云ふことになつて來る。（笑）そこで『天人及び阿修羅よ』と云ふて、ヒコ〳〵動く者よと云ふ工合にギューッと頭を抑へられて居る、其處は天台も解釋せられ、妙樂も解釋せられ、日蓮聖人も解釋せられて居る。

（二四）本佛顯本の的文

皆今の釋迦牟尼佛は釋氏の宮を出でゝ伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へり。

お前達は、皆今の釋迦牟尼佛は、初め悉達太子として釋氏――釋氏と云ふのは釋迦氏と云ふことで、日本で申しますれば源氏とか平家とか云ふ譯であります

す、其の釋迦氏の淨飯王、摩耶夫人の間に悉達太子として生れて、其の御殿即ち釋氏の宮たる迦毘羅城を夜半に拔出てて――即ち彼の愛馬の乾陟に打跨がり車匿と云ふ馬丁を引連れて城内の寢靜まつて居るのを見計つて宮城を脫け出でて、さうして修行を積んで大成道を遂げられたのである。其の事を此處に言ふのであります、伽耶城と云ふ所を去ること遠からぬ道場に坐して、尼連禪河に浴してさうして阿耨多羅三藐三菩提――是は梵語でありますが、無上道、或は無上覺と兩方に譯するのであります、即ち此の上もなき道、此の上もなき覺である、菩提と云ふことは覺でもあり、道でもある、是は兩方に通ふのであります、阿耨多羅三藐三菩提即ち此の上もなき道、此の上もなき覺を得たものであると謂つて居る。此の間まで悉達太子と云ふ人間であつた者が、大分偉い人間であつたが一生懸命行を積んで、初めて佛樣になつたものと謂つて居る。併し此の始めて佛樣になつたと謂ふのが間違である、それを近成を破すと云ふ、近成と云ふのは近く佛になつたと謂ふことで、此の頃流行る成金と云ふ言葉見たやうなものである、成金的の佛だ、（笑）此の間まで人間であつたけれども行を積んで――ウンと儲けて無上正覺を得た成金的の佛である、近成の佛であると謂ふが、さうではない、決して左樣な者ではない、久遠實成の如來なりと云ふことを說き現はす爲に、それを引繰返された言葉が、

然るに善男子よ。

となつて居るのである。『然るに』と云ふことは、一應許して而も許さぬ意味に、はね返してある。是は或は『然れども』と讀んでも宜い、假名の附け方は兩方あるが、汝等はサウ謂つて居らうが、併しナーと返つて、

我れ實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗劫なり。

我は眞實佛の悟を開いてから今日までは、指折り數ふれば無量無邊百千萬億那由佗劫と云ふ久しい以前である。

（二五）五百塵點劫の說明

劫と云ふのは一つの劫さへ非常に永いことである。どの位永いかと云ふと、算盤に乘らぬ位だと云ふ、是れは色々解釋があるけれども、一番分り易いのは阿含經に據れば、百年に一遍天人の羽衣を以て大きな石の山、（縱廣一由旬高さ一由旬とある、一由旬とは四十里だといふから、四十里四方の大きな石の山）を摩つて、又百年經つて羽衣で石の山をちよつと摩る、百年毎に斯うして居る內に、到頭其の大きな石の山が磨り減されてしまう程の年數が經つたら、それが先づ一劫だとある。（笑）大分永い話でありますが、其の永い一劫を今度數へて見た、一劫二劫と數へるのだが、迚も千や萬で數へ切れないから、無量無邊百千萬億那由佗劫だと云ふ、此の那由佗と云ふことは日本の數には無いから、數限り知れないと云ふことである。併しそれは非常に古いけれども、どの位古いかと云ふことに就て、此の次の所に譬が擧げてある、それは壽量品の五百塵

點の譬と云つて名高いものでありますが、經文が長いし、譬のことであるから其の印刷物には省いてある。それは『譬如五百千萬億、那由佗阿僧祇』と云ふ彼の長く說明されてあるお經である、それはどう云ふ事であるか――こんな事は詳しく言はないても宜いけれども、一寸大體はお話して置かなければならぬ、さうすると、『三千大千世界を人ありて抹して微塵と爲す』――三千大千世界と云ふのは、非常に廣い世界である、『三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ』と云ふことがあるが、あれです、其の三千大千世界と云ふのはどの位廣いかと云ふと、印度の傳說の方から來るのでありますが、此處に須彌山と云ふ山があつて、其の山の四周に東西南北の世界がある、今の人間の居る世界は南閻浮提と云つて、其の南に當る世界だと云ふ。これ等の四つの世界を須彌四洲と云ふのであるが、尙ほ之を詳しく云ふと、九山八海と云つて前に言つた須彌山を中心にして其の四周に八つの大きな山がある、さうして須彌山と此の八山の間に

各〻一つ宛の海があつて、都合八つの海がある。さうして天動説であるから、此の須彌山の上にお日様が廻つて居つて、四大洲と云ふものがある、即ち須彌日月、四洲と云ふことで一つの世界を説明して居る。此の一つの須彌山を中心にした世界を千合せたものを小千世界と云ふ、それから此の小千世界を又千合せたものを中千世界と云ふ、其の中千世界を復千合せたものを大千世界と謂ふのである。三千大千世界と云ふのは、大千世界を三千合せたと云ふ意味ではないので、小千世界、中千世界、大千世界と云ふ、三つの千世界から大千世界と云ふものは成立つて居ると云ふので、小、中、大合せて三千と云ふ、本當は大千世界一つの事である。て此の大千世界を數にすると云ふと、百億の日月、百億の須彌、百億の四洲是だけて一つの大千世界だと云ふ、非常な大きなことであります。（笑）其の三千大千世界を抹して微塵と爲すとあるから、木片微塵に碎いて白墨の粉のやうにして、其の三千大千世界の塵を目安にして、東の方五百千萬億那由佗阿僧祇の國を過ぎて乃ち一塵を下す――非常に長いことである。又東の方へ行つて五百千萬億那由佗阿僧祇の國を過ぎて乃ち一つの塵を下す、斯う云ふ風にして、前の三千大千世界の塵が無くなるまで東へ行くのである、中々〻それは、えらい事だ。さうして歸りがけに今度は其の塵を落した世界も、其の間の落さない五百千萬億那由佗阿僧祇の國も、皆悉く一遍に之を木片微塵に灰にしてしまう。さうして其の灰の一粒を、先刻の天人の羽衣で石の山を摩する一劫と云ふ年數の目安に置いて、其の一劫に灰を一つ宛置いて行く、さうして其の灰が無くなつてしまつた時を先づ五百塵點劫と斯う云ふのである。是て濟んだかと思ふと、未だ〻〻此の五百塵點劫より更に古いこと〻〻――之に過ぎたること百千萬億那由佗阿僧祇劫と云ふことがお經には説いてある、非常に古いことだ、佛が成佛してから今日まで、此の位の古い〻〻永い〻〻年數が經つて居ると云ふのである。そこで實にどの位とも申し様のない古いことにな

つて居るのであります。何の爲に斯う云ふことを說いて居るかと云ふと、此の間岩野大監が此の講壇でお話をされたことがありませうが、數と云ふものは直に眞理を現はし得るものなのであります。吾々は斯う云ふ話を聞いた所で、一向趣味も感ぜず、分らないのは、詰り此方の智識が低いものですから、迚も思想が其處まで伸びない。さう云ふ事を聞いて、ズーッと凡そでも考へて見られれば宜いのですけれども、智慧の淺い者程數と云ふものは混線して來て分らなくなる。であるから極馬鹿の者でありますれば、十まで數へられないでせう、子供の時分試して御覽なさい、一つ、二つ、三つ、五つ、七つ、六つ……直ぐゴチャ〳〵になる、初めてそれが數へられる所から段々物心が附いて來るのであります、それが今のやうな事になりましては吾々は子供と同じことで、頭腦がグラ〳〵してしまつて何も分らない。そこで佛敎の思想の偉いと云ふことは、是でも分つて居る、此の數の立て方で恐れ入つてしまう譯である。其の五百塵點劫より更に古いが故に、之を久遠と云ひ。更に之に無始と云ふ字を附けて、久遠無始と申すのであります。詰り引繰返しますから、是が始なしと云ふことになる、其の位古いことを說いて置いて、更に之に過ぎたると云ふことを仰せられるが故に、是が始のないと云ふことに解釋されるのであります。

(二六)本佛有始の謬見

之を始があると云ふことに觀ますのは、弘法大師あたりもそんな風に解釋しましたけれども、それは間違つて居ることであります。又日蓮宗の學者にも現に京都の妙顯寺の河合日辰と云ふ人は、壽量品に對して探靈と云ふを書きまして、變テコな事を言つて居ります、學說としてはあゝ云ふことは許されない。此の壽量品の說を以て始があることに解釋しますれば、弘法大師の言ふが如く戲論となつてしまう、幾ら古くとも始があつたなら哲學上の思想では同じことであります。始あるものは終ありと云ふことになつて、常住と云ふことにならない

ないのであります、眞の實在は始なき無限と云ふことを説明せんければならぬ、こんな事は哲學をやつた人なら直ぐ分ることである。（拍手）故に此の壽量品を翻譯した羅什三藏が、弟子の僧叡と云ふ人に講釋を書かせて、

壽量品は數に寄せて非數を説くなり。

と解釋をして居ります、數を今敎へて居るのではない、非常に古い事を言つてさうして數でない無限を説明するのであります、非常に古いと云ふ所まで思想を引伸して更に始なしと斯う説くのであります。之を又そんな面倒くさい事を言はずに、初めから無限と言つたら宜いではないかと云ふ人もありますけれども、それではいかぬのであります。伸び切るだけ今の通りに、三千大千世界を抹して微塵と爲し云々と云ふことで伸ばして置いて、更に復之に過ぎたること百千萬億那由佗阿僧祇劫なり、即ち無限だと云ふ、此處が壽量品の偉い所であります。丁度日本で申しますれば、日本の國が肇つてから既に三千年に近い所の古い國である、其の前神代からの事を考へれば漠たり洪荒であります、所謂國を肇むること宏遠であります。是は何處の國でも、唯だ舊い國だと云ふことを言つて居るのでは駄目だ、日本は既に神武天皇から已來でも舊い所の國であるが、更に其の本へ行けばモット〳〵舊いが、其の前は更に舊い、さうして漠たり洪荒と云ふことに繋がるのである、君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで、是れ即ち日本の國の生命を説明したものである。（拍手）そんな面倒くさい、神武天皇から三千年だ、其の前はモッと舊いなんと言はずに、唯だ舊い〳〵非常に舊いと言つて置けば宜ひぢやないかと云ふけれども、それではいかぬ。又或者は久遠だとか始がないナンと言はないで、十萬年とか百萬年とか極めたら宜いではないかと云ふもあれど、それではいかぬ。漠たり洪荒、國を肇むること宏遠――其處に何とも言へない絶對の價値が現はれて居るのであります。（拍手）

そこで是が即ち唯今申します時間上からしてお釋迦様の顯本をしたものであります。此の間四十年前に佛になつた成金的の佛かと思つたらさうではない、五百塵點久遠無始の本佛であらせられたと云ふことである。此の本佛と云ふことは、權迹の迹佛に對して言ふのであります、――一體今の日蓮主義の多くの人は、學說がメチャ〳〵である、こんな事は極まり切つて居つて、小僧でも昔は知つて居つた。本佛と云つてもそれはお釋迦様の事ぢやない、それぢや誰だと云ふ……今では全く無茶な話である。そんな無茶苦茶を言つては駄目だ、本佛と云ふことは壽量品に於て初めて說かれたことである、現在顯はれて居らる釋尊の現身の如來に就て絕對の價値を顯はしたことが、壽量品の顯本である、妙樂大師曰く、一切經を幾ら繰返して見ても、壽量品を除いて外には顯本の說なしと。故に日蓮聖人は、一切經の中に壽量品なくんば天に日月なきが如しと言はれた、又『涌出、壽量の二品を除いては皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷其の外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終は說けども應身報身の顯本は說かれず』と喝破せられたのである、是は飛切りの所ぢや、諸君が上の空で聽いて居られては駄目である。

(二七)本佛を信解せざるの失

佛敎の中に於ては色々善い事が說いてある、日蓮聖人も開目鈔に於て、法華前後の諸大乘經或は大般涅槃經、皆善い事があるけれども、涌出、壽量の二品を除いては皆始成を存せり――どうもお釋迦様は成金的の佛様だ、阿彌陀様が出て來れば光が無くなつたり、お釋迦様がなくても事足りることになる。然るに壽量品に於て一度顯本すれば、開目鈔の下卷の方に出て居ります如く、此の佛が一ト度顯はれたならば、一切の如來は皆此の釋尊の分身と云ふことになる、又開目鈔の初の方には斯う云ふことがある。

此の壽量の佛の天月しばらく影を大小の器に浮べ給ふを、諸宗の學者等近

くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品をしらず、水中の月に實月の想をなし、或は入つて取らんと思ひ、或は繩をつけて羈ぎとゞめんとす。（開目鈔七六五）

天の月が井戸に映つて居るのを知らずに、猿が、是はお月樣が可哀相だ、井戸の中にはまつて居らるゝと云つて、手長猿が手を繋いで――印度の井戸は日本のやうな淺い井戸ではありませぬ、高原の井戸でありますから深い――さうして井戸の中のお月樣を取らうとする。『或は入て取らんとし或は繩を以て羈ぎとどめんとす』――繩を持つて來い、繩で括つて引上げやうと云つて騷いで居る、各宗の高僧は學者であるかは知らんけれども、手長猿も同じことだと日蓮聖人は仰せられた。（拍手）天台の曰く、天月を識らずして唯池の月を觀る。（拍手）『今夜はお月見だから君も來て呉れ、月見團子を拵へたから』と言つてやつたので、客が來た所が、其處に行水をした水が盥に殘つて居て、それに十五夜の月が映つて居たので、それを見て主人が『是は良い月だ』と云つて居る、お客に

來た人も盥の月を見て『成程今夜は良い月だ』と云つて團子を食つて居る。其處へ下女がやつて來て、モウ行水も濟んだからと思つて、主人と客が之を見て話をして居らるゝのも知らずに、盥の水をザーッと打まけてしまつた。盥はあるけれども水が無くなつたので、今度見たらお月樣が無くなつた。『サア大變だお月樣がなくなつた』事に依つたら椽の下へ飛込んだのではないか』と云つて、跣足で飛降りて椽の下を覗いて居る人間があつたならば、之を何とか評せん。（笑）阿彌陀樣が無くなつた、是は大變だと云ふやうな人達は、盥の月を見て其處に實の月ありと思ひ、或は下女が盥を覆ぜば、椽の下へ這入つたのぢやないかと思つて、跣足で飛降りる人と同一般である。（拍手）故に天台智者大師が壽量品の講義に、盆を撤して漢を仰ぐべしと云つた、盆と云ふのは盥のことである、日本では盆と云ふと斯う云ふ小さいものだけれども、支那では盥のことを盆と云ふ、盆を撤してと云ふのは、除き捨ると云ふ字だ、盥の水を撤てし

まへと云ふことである。それから漢と云ふのは、雲漢などゝ云つて天のことである、漢を仰ぐべしだから、天を仰げと云ふことである。盥に映つた月を見て、どうしても天の月を見ないと云ふやうな變な月見客が來たならば、早く下女に盥の水を打ちまけさして、俺の所の月見は天の月だゾと云ふことを見せてやれ（笑）それでも未だ分らぬで、俺は盥の方が宜いと云つたならば、聾駭何ぞ道を論ずるに足らんや……聾駭と云ふのは、馬鹿に疋をかけた奴だ。（笑）馬鹿者と云つて、あとは呶鳴り付けて澤山だと云ふ。俺は盥の方が宜い、折角俺が月を見て居つたのに、何故盥を引繰返したんだ、あゝお月様が無くなつたと云つて泣き出すやうな奴があつたら、馬鹿者ッと呶鳴り付けてやれ、それでも氣が附かなかつたら脊中をどやし付けろと云ふ。（拍手）佛敎徒は阿彌陀様が無くならうが、藥師様が無くならうが、左様なことは一點憂ふるに足らぬ。今釋迦牟尼如來の權威が衰へて、釋迦牟尼如來は大して偉い者ぢやないと云ふことになると同時に、佛敎全體の聲價は地に墜ちるのぢや。（拍手）苟も佛敎を執つて之を世界の人類に與へんとするならば、飽までも釋迦牟尼佛の絶對の權威を保持せんければならぬのである。（拍手）それが分らぬやうならば、聾駭何ぞ道を論ずるに足らんや、ドシーンと脊中をどやし付けてやればよい。

（二八）本佛の本土と化境

少し横道へ入り過ぎたから今度は經文に返りますが、第三は『是より來た』——是は前の久遠無始と云ふことが分つたから、そこで其の始めなき根本より此のかたと云ふのである。此の久遠無始の根本より此のかた、永い間何をして居つたかと云ふと、

是れより來た、我れ常に此の娑婆世界に在つて說法敎化す、亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。

此の永い間、常に娑婆世界を中心として說法敎化をした、娑婆世界は初めか

らお釋迦様の中心の世界である、之を本土と云ふ。さうして又餘處の方でも働いたと云ふ、是が有難い所だ。此の娑婆世界を本土に取つて、安養世界だらうが淨瑠璃世界だらうが、十方の餘處の千百萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利すると云ふ、そこで此の娑婆世界を本佛所居の國土と云つて、是が中心になつて、四方八方に煙火が飛んで行くやうになつて居るのが、釋迦如來の活動である。始めなき已前より即ち十方の世界に於て衆生を敎化せられるので、此の一つの佛は身を分けて幾つにても働かれるのである、佛はたつた一つのものであるナンと思つて居つてはいかぬ。（拍手）如來秘密神通之力を以て、即ち無限の活動をせられるのが本佛である。そこで此の娑婆世界及び餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國を益物の處と云ふ、所謂衆生を利益する處である。お釋迦様が衆生を敎化せられる範圍、働く場所はどこであるかと云ふと、十方の即ち百千萬億那由佗阿僧祇の國である。安養世界でも淨瑠璃世界でも、何處へても羽を伸ばして、皆お釋迦様の羽の下に入れてしまう。斯うなると非常に大きな佛様であると云ふことが、段々分つて來るでせう。此の久遠無始の本佛が、成佛してより此のかた常に娑婆世界に在つて說法敎化し、又餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利する、此の思想を日本人が一遍了解せぬと云ふと、迚も西洋の思想に對して打勝つことは出來ないであらう、之をさへ了解したならば、西洋の宗敎が幾らやつて來ても、此方の釋迦如來は、是れより來た我れ常に此の娑婆世界に在つて說法敎化す、亦餘處の百千萬億那由佗阿僧祇の國に於ても衆生を導利して居らるるのだと云ふことになる、（拍手）さうすると向ふの方がホーッと驚いてしまう。（笑）是が眞の日本の宗敎――是が本當の釋迦牟尼如來の敎であるのであります。

（二九）迹佛に迷ふを破す

それから其の次は、執迹の情を拂ふ、佛が此の娑婆に出た、他の世界にも出

たと云ふ、前の譬で謂へば盥に映つた月に執着する考を打拂ふ經文である。阿彌陀如來は別のものだとか、藥師如來は別のものだと思つて居るから、之の執迹の迷想を打拂ふので、此の事を迹の上の疑を拂ふと云ふのである。即ち日蓮聖人の仰しやつた、

發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず。（開目鈔七六五）

と云ふことである。日蓮主義者は之を讀めば身振ひする程でなくてはならぬ、説明などを聽いて居る間は野暮なんである。そんな事を何遍も言ふて聽かして貰はなくてはならぬやうでは駄目だ、實に日蓮聖人に相濟まぬ譯である。能く間違つたものです、徳川政府が三百年掛つて強いて間違ふやうにして、坊主にも日蓮聖人の書かれた物は少しも研究させない、天台大師の書いた物だけを研究するやうな事になつて居つた、それも生ぬるい研究だから、まるで居睡り半分で、何も責任がない、そこで之を酸漿檀林と云つた、それはどう云ふ譯かと云ふと、時候が來たならば酸漿は皮の中で紅く色が附く、それと同じく時期が來たならば檀林を出て、赤い袈裟を掛けさへすれば宜かつた、中には經文などはそつち退けで、草双紙を見て居るやうな者もある、遊んで居ても構はない、寧ろ天台學の講義などは餘り確かり聽いて貰つちや困るのだから、宜い加減な事を言つて居たものだ。之を三百年やつたものだから、居睡りに居睡りをして全く骨拔きになつてしまつたのであります。日蓮主義者は在家の信者でも今説くが如き事は昔は皆心得て居つたものであります。（拍手）日蓮聖人が開目鈔を佐渡が島から信者達に送られた時に、

雪中にしるして有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず（開目鈔八〇四）

と仰せられて居る、日蓮はモウ今度佐渡が島に於て死ぬかも知れぬが、一世一代の魂魄を此の中に留めると云つて送られた開目鈔である、之を戴いた信者が

上の空で之を讀む氣遣はないのであります。（拍手）皆骨身に泌みて居るから、何でも此の正法の敎を以て先づ日本國を敎へて、日本乃至一閻浮提廣宣流布の大願を成就せんければ止まぬと云ふ決心を以て起つた者である。（拍手）私のやうな者は日蓮主義者の本領から云へば何でもない、なみの軍曹か伍長位のもので、迚も是は少尉になれない者である、上等に行つても特務曹長か、今度新に出來た准尉に止まる人間である。多くの者は皆兵卒の中でも上等兵になれぬやうな者ばかりである、（笑）それ所ではない、露探だの獨探だの、碌でもない者が澤山に出來た、（拍手）そこで此の迹の上の疑を拂ふのであります。即ち、

諸〳〵の善男子よ、是の中間に於て、我れ然燈佛等と說き、又復其れ涅槃に入ると言ひき、是の如きは皆方便を以て分別せしなり。

此の文だけで明かな事である、明かな事であると云つても、講釋せんければ分らぬでせうけれども、諸の善男子よ、お前等能く聽け、『是の中間に於て』——と云ふのは、始めなき以前から今日天竺に出て、今法華經を說いて居る、久遠の始から今日までの中間である、即ち此の間に於てと云ふことである。それから『然燈佛等と說き』と云ふのは、然燈佛と云ふ佛を說き、其の他澤山の佛を說いた、阿彌陀佛と云つたり、色々名前がある、それを略して『等』と云ふ字を以て收めたのである。『又復其れ涅槃に入ると言ひき』——色々の佛になつて出て來て法を說いて涅槃した、出現、說法、入涅槃と云ふことを說くけれども、それは別々の佛ではないのである。『是の如きは皆方便を以て分別せしなり』——他の佛のやうに說くけれども、實は此の釋迦牟尼如來の働きの一部分を說明したものに外ならぬのである。それを斷つてしまへば別々になる、澤山說かれたものは他の別の佛であると思ふ者は、即ち釋迦如來の大活動を知らないことになるのである。故に段々其の事を詳しくお說きになつて居るのであります。

（三〇）本佛絕大の活動

即ち其の次の所に於ては、此の本佛の大慈大悲の精神から現はれて、一切の働きが起つて來る、此の佛の大慈大悲の心が根本であると云ふことを説明してある、之を意輪の感應と云つて、お釋迦様の意から活動を起すのであります。

イ、大慈悲の意輪

其の文は、

諸〳〵の善男子よ、若し衆生有つて我が所に來至するには、我れ佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨つて、處々に自ら名字の不同、年紀の大小を説き、亦復現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、又種々の方便を以て微妙の法を説いて、能く衆生をして歡喜の心を發こさしめき。

諸〳〵の衆生あつてお釋迦様の所に集つて法を聽く時には、釋迦如來は佛眼を以て——『佛眼』は佛の眼であります、眼と云ふのは心であります、心が無ければ眼の作用と云ふものはない。慈眼視衆生と云つて、眼に慈悲が現はれるものである、『目も口ほどに物を言ひ』と云ふ川柳を諸君は知つて居るであらうが、眼に於て其の人の精神と云ふものは現はれて來る、眼は僞りのないものである。嘘を吐く時は眼の光を失ふものだ、だから其の者の眼を一寸見れば、嘘を言ふか言はぬか直ぐ分る。又非常に優しい人は、眼に最も著しく慈悲が現はれて來る、お母さんならお母さんが子供に小言を言つても、眼を見て御覽なさい、涙を浮べて居らるるのである。（拍手）眼は即ち精神の窓であるから、嘘を言ふか言はぬか、斯うして眼を見て居つたならば分る、此の人は本當の事を言ふかナと思つたら、眼を見れば直ぐ分る。（笑）お釋迦様が佛眼を以てと云ふのは、大慈大悲の眼——慈眼を以て衆生を視ると云ふことで、慈悲は今言ふ通り眼に出て來るから、慈眼と云ふ、詰り大慈大悲の精神を以て一切衆生を視ると云ふことである。此の視るのも、お釋迦様の觀方は顔を視るのではない、『信等の諸根の利鈍を觀じて』と云つて、意を視る、此の人間は斯う云ふ風にすれば信心

が起る、斯う云ふ工合にすれば善根を爲すと云ふことをちやんと觀察なさる。『信等』と云ふのは信および其の他の五根と云ふ意味である、五根と云ふのは、信心する所の心即ち信、それから念と云つて善い事を續けて考へて行くこと、第三は精進と云つて、善い事を考へたのを實際に行つて行くこと、それから定と申して、其の善事を行ふに當つては如何なる事があつても動搖しないこと、それから慧と云つて賢い所の智慧、之を五根と申します。これに皆根の字を附けて、信根、念根、精進根、定根、慧根、即ち五根となる、此のあとの四根を略してあるから、『信等の諸根』と云ふ。此の信等の五根の利鈍を觀じて――是は善い事をするに元氣のある奴だ、是は元氣のない奴だと云ふことを視て、一つ叩いて飛び出す奴と、三つ叩かんければ飛ばない奴と、ちやんと御覽になつて居る。

ロ、名字不同の迹佛

さうして『度すべき所に隨つて、處々に自ら名字の不同』――名前の違つたやうな話もして聽かせると云ふ、阿彌陀樣だとか、藥師樣だとか、色々名前の違つた話をすると云ふのが名字の不同、それから『年紀の大小』と云ふのは、即ち其處に現はれて來る佛に就て、阿彌陀如來は十劫正覺であるとか、誰は何年と云ふやうに、年代の違ふことを話すことである、そこで色々名前の違つた話や年代の違つた話をするのも、皆衆生を敎化せんが爲の故にさう云ふ事を說くのである。此の『名字の不同、年紀の大小』と云ふことで、幾ら佛樣が澤山に說かれてあつても、是はお釋迦樣が說法しただけのものだと云ふことになる、名前が違つて居らうが、年代が違つて居らうが、皆是は衆生敎化の爲の故に釋尊が說かれたものである。さうして涅槃に入つたと云ふやうな事も說き、又色々の方便を以て有難い話もするけれども、皆是は釋迦如來の大慈大悲から出てしに外ならぬ、即ち意輪から働いて來たものである。

ハ、歡喜法悅の勝益

さうして『能く衆生をして歡喜の心を發こさしめき』――是が大事な所であります、歡喜の心と云ふことは、唯だ喜びの心を起したと云ふだけであるけれども、宗敎の大事な利益、効果と云ふものは、此の歡喜の心に歸着するのであります。病氣が治つたら宜いとか、死んで靑鬼に取つかまらんければ宜いと云ふ事ばかり考へるけれども、歡喜の心さへあれば、閻魔法王の所へ行つても宜い、地獄へ行つても閻魔法王が出迎へに出て呉れるのであるならばそれは結構である、『どうぞ一晩お泊り下さい、御馳走は十分致す、不都合は致しませぬ』、斯う云ふやうな事であるならば何も閻魔法王の所に一晩位泊つても構はない、色々旅もしたけれども閻魔の宿で泊つたのが一番面白かつたと云ふことになるならば結構である。如何なる場合があつても――病氣でも何でもない、面白いならば一つ病氣をやつて見ても構はない。詰らないと云ふことになれば、達者で暮

しても詰らないと云ふことになれば、達者で暮しても詰らない、親の所に泊つても一晩中蚤に喰はれて眠られぬと云へば、困つたことである。そこで歡喜の心を如何なる場合にも失はぬやうにしてやる爲に、佛樣は衆生をして歡喜の心を發こさしめき、病める者は病める所に歡喜を現はし、苦しめる者は苦しめる所に歡喜を現はす、是が大事な所であります。女に生れた者は女はクヨ〳〵して詰らない、男ならば宜いがと願つて居るかも知れぬが、それぢや俺が神通でパッと男にしてやらうかと云つたら、御免蒙るに違ひない、そんな嘘を吐いても駄目である、だから女は女として歡喜を得させる、年寄になつた者がどうも詰らない、年を取つてしまつては駄目だ、モウ一遍若返れば今度は決して無駄な事をしないが、遺憾なる哉七十八歳になる。（笑）是では詰らぬと云ふけれども、七十八なら七十八のお爺の儘に、其の老人の心の中に輝く光明を與へるものが佛敎である。（拍手）是が一番良いことである、ケチな事を言ふては駄目

だ。お經の中にも説いてあるが面白い事がある、或る男が非常な金持の倉の中に這入つた時に、其の金持が言ふには『お前さん一番好い物をお取りなさい、何でも此の中で寶は二つは遣れぬ、一つお取りなさい』と云つた、所がどれを見ても欲しいやうな結構な物ばかりで、どれを取らうかと思つて迷つて居る、何時までも見て居つてはいかぬ、倉を閉めなければならぬから、思ひ切つてお取りなさい、さう云つたので、何でも一つの物の中に色々のものがあるのが宜いと思つて見た所が、其處に鏡があつて、色々の物が澤山映つて居る、是は一つだけれども此の中には澤山あるから宜い』と思つて、其の鏡を抱へて倉の外に飛出して、明けて見た所が何にも無くなつてしまつた、(笑)それでは詰らぬことである。宗教へ入つて唯だ影法師の映つて居るやうなものを有難く思つて居るのは詰らぬ事である、又假令法華經でもさうである、お自我偈が有難いと思つて、幾らお自我偈を無茶無茶に讀んでも、お釋迦様は出て來ない、それぢや駄目である。本當の有難いと云ふものは、實質實がなくてはいかぬ、活きた吾々の日々の精神――或は怒り、或は悲しみ、或は惱み、或は悶える所の活ける精神の中にパーッと移つて、如何なる場合にも歡喜の心を失はないと云ふのが、宗教の活きたる效果である。(拍手喝采)そんな巧い事が行けるかと云ふ人があるかも知れぬが、それが行ける。又今度宗教に入ると、それをやつて見るのが面白くて堪らない。涼しい風が吹いて來た時分に、好い心持だと云ふのは素人の言ふことである、暑くて汗が流れて堪らぬ時分に、好い心持であると云ふことを言ふて御覽なさい、それは面白いものだ。能く『あなたは餘り演説して疲れたてせう』と云ふ人があるが、私は今日も砲兵工廠で隨分大きな聲で演説をした、歸つて來た所が法要があつたり何かして、上野の方へも行き、『そんなに多忙ではクラ〳〵して眼が廻りはしないか』と言はれたが、『ナーニ何ともない』と云つた、其處が愉快な事である。やるだけやつて斃れても構はない、

是は私自身の事のやうだが、私は今度は非常に決心して居る。此の間地方に行つた時にも、夜行で靜岡の講演を立ちまして、それから米原に於て乘換へる、西の方から來る直江津線に乘換へるのですが、何しろ夜半の一時ですから、どの室も皆滿員である。仕方がないから自分は漸く腰掛ける所を少しばかり見附けて、一睡も寢ずして福井へ行きました、行くなり福井の朝の講習會に出席をした。それから其の講演が濟むと、講演場から直ぐ停車場へ飛びつけて金澤に行つた、福井から金澤へ行くには急行でも二時四十分かゝるので、十二時四十分に金澤へ行つた。隨分暑い時分でありますが、其の前の晩夜の目一睡も寢て居らぬ、汽車の中で搖られ通して行つた、然るに復福井の汗を拭くことも出來ない、演說場から直ぐ連れて行かれるので、大勢人の見て居る前で肌を脫いで拭くことも出來ませぬから、其の儘、加賀の金澤に着いて漸く晝食を取りまして二時開會の講習會に出席した。私一人が講師でありますから、二回に亘つて五時まで講演を致しました。さうして其の儘會場から五時四十分の列車に乘つて福井に引返しました、それが八時二十分、さうして夜の講演會に、モウ人が寄つて居ると云ふので、其の儘會場へ行つた、私は未だ晩飯を食つて居りませぬから『飯を食はせ』と云つた、所が『どうぞ演說が濟んでからにして呉れ』と云ふ、私は『腹が減つては演說は出來ない、聽衆は待たして置いても、兎に角五分間あれば飯は食へるから……』『それでも食事の用意をして居りませぬ、今夜演說が濟んでからお宿にお歸りになりましてどうぞ……』（笑）『それはいかぬ、澤庵でも冷飯でも何でも持つて來い、箸と茶碗さへあれば宜い』と云ふので漸く持つて來させて、隨分澤山食つた、殊に此の位腹がへつて居ると云ふ所を見せなければいかぬから、ウンと食つてやりました。（笑）それから演說が終りまして、宿まる寺へ歸りましたのが十一時であります、少しばかり話して寢たのが十二時でありました。其の寺は小さな寺で風呂が無いのでありますが、

風呂に入れとも言ひませぬ、仕方がないから、信者が歸りましてから兎に角水を持つて來いと云つて、漸く靜岡以來の汗を拭いて寢ました。非常に暑い時分て、夜の目も一睡せずてすから、大抵の人なら眼がクラ〳〵したてせう。併し自分は心に私かに考へた、斯うしてやらなければどうも日蓮聖人の弟子とは云はれない、此處に宗教の信念の力と光とが輝くのてあります、（拍手）縱し卒倒つても宜しい、未だ少しやりたい仕事もあるけれども、どうも現代の日蓮主義者が餘まりのらくら者が多いから、一つやつて見せなければならぬと思つて居ります。是は自分の事て、自慢話見たやうてあるけれども、さう云ふ意味てはないのてありまして、お互世にある以上は、どうしても一つ歡喜の心を如何なる時にも、失はぬやうにやつて行きたい、それが又其の人々の爲にも幸福てある。あゝ不仕合せだ、あゝ詰らぬと云つてお婆は歎く、嫁はこぼす、家へ行けば皆萎れたやうな面をして居ると云ふことになつては、實に始末が惡い、（笑）

そんな事てはいかぬ、家へ歸つてお婆さんを見れば、ニコ〳〵して私見たやうな仕合者は無いと云つて居る『お祖母さん、何がそんなに仕合ですか』『何がつてお前、斯う云ふ信仰の光を有つて居るてはないか、そんな事は問ふだけ野暮だ』、又嫁を見れば、是もニコ〳〵して居る、『お前大變ニコ〳〵して居るが、何か面白い事てもあつたか』『何がつて貴郎、此の信仰を有つて居るてはありませぬか、日蓮聖人の流を汲んて居る者がクヨ〳〵して申譯がありませぬ』斯う云ふ風に家庭の者が信仰に生くれば、親父の精神はズッと良くなる。（拍手）是は何よりも彼よりも、歡喜の心を以て家庭を作り、社會を作り、國家を造る、それが人生の最後てある。（拍手）喜んだ上に何か貰ひたいと云ふのは、是は乞食てある、（笑）喜んてしまへばそれがお終ひだ、それが宜いのだ。是に就て法華經は能く說かれたものてあります、一切の利益を歡喜の心と云ふ所に納めた、お釋迦樣は偉いものてす。一切如何なる者ても、馬鹿ても、性の惡い者ても、

困つて居る者でも、落魄れた者でも、誰でも皆衆生をして、歡喜の心に入らしめることを得たと云ふ、是がお釋迦様の働きの偉大なる所であります。

（三一）本佛降誕の大因緣

それから今度は形を顯はす方を說いて來るのであります、親切のある者はどうしても形を顯はして來なければなりませぬから……。之を機感と云ふ、機感と云ふのは衆生に善根の機根があつて、法を受ける方の人々がありますれば、佛がそれに應じて現はれて來なければならぬと云ふことである。親切なる者は必ず動き出す、動かぬ者は駄目である。親でも子供が、可愛いと思へば、直ぐ子供の方へ來ます。子供が親を慕うたならば、直ぐ親の方へ行きます。至誠息むことなしと云ふことがある、息むことなしと云ふのは靜として居れぬと云ふことで、どうしても動き出す。高島嘉右衞門先生に、至誠息むなしとは何だと聽いたら、口を閉ぢて居る事で息する無しと讀むと言ひました、まアそれも一つの說でありますが、口を閉ぢれば大分眞面目になる、口を開いて居る者は馬鹿になる、本當に口を閉ぢて二分間も呼吸をせずに居れば、大分しつかりして來る。併しそれだけでは――子供を睨んで、可愛い子供だ、ウーム、それぢや駄目である。（笑）本當に可愛いと云ふと働き出すものである、此の子供を愛するには金も拵へて置いてやらなければならぬと云つて、親父は汗水たらして働く、暑いけれども此の子供を愛するが爲に、學資金も溜めて置いてやらなければならぬと云ふので、父親も母親も活動をします、それであります。必ず愛とか親切と云ふものは靜として居るものではない。寢ころんで居ながら可愛い奴だ〳〵、そんなものではない。（笑）阿彌陀様が果して安養世界に居られて、念佛を唱へる者を可愛い奴だナーと云ふやうな事を考へらるゝなら、餘程親切が足らぬ佛である。（拍手）お釋迦様は靜として居れないから、此の衆生を濟度するが爲に、如何にしたらよいかと云ふので、此の人間の前に降誕せられた、ド

シーンと生まれて來られた、其の響は三千年後の今日、今此處までもドシーンと響いて居る。（拍手）是はえらい生まれ方である、其處が大事な所である。其の機感――機根に應じて、信ずる者があればそれに應じて救ふと云ふことは、どうしても接近しなければならぬ。是は芝居でするのが一番良い、尤も無闇に親子が抱き付いては恥かしいから、親子が出て來ても、『御機嫌宜しうございますか』と云ふやうな事を言ふけれども、本當に赤裸々にしたならば、芝居で親と子供と出會つた時には相抱くのである、彼の阿波の十郎兵衞とか云ふ芝居で巡禮になつて自分の子供が親を訪ねて來る、自分の子だけれどもどう云ふ譯か親子の名乘が出來ない、併し母親の方が巡禮の子供を抱いたり色々する、彼處です、あれが親子の眞情を形に現はして居る。親子の名乘りは出來ぬけれども『氣を附けて行きなさいョ』と言ふ所など、實に見て居つても胸が迫まる譯であります、親は子供の顏を見、子供は親の顏を見、互に手を握つて居る、實に善い所であります。此の接近すると云ふことがどうしても必要である、吾々ともお釋迦樣の方へどうしても進んで行く、佛樣の方からも此方へ進んでお出でになると云ふので、之を感應道交と云ふのである。肉體の感應であるならば體が行かなければならぬけれども、精神の感應であるから、渴仰の心と云ふものが起つて、佛樣の大慈大悲の精神に接する、又佛樣の大慈大悲の精神が、吾々の活ける精神の中心に感應する、其の有樣を不思議の感應と云ふ、之を丁度月が水に映るやうに說明されて居る。水は昇り昇らずして月を迎へ、月は降り降らずして之に映ず――水を盥に入れて天へ持つて行つて、此の中に這入つて下さいと云ふ譯ぢやない、（笑）又ドブンと云つて這入りはせんけれども、水は昇り昇らずして月を迎へ、月は降り降らずして水に映ずるのである。幾萬里離れて居つても、大慈大悲の佛と吾々の信心の心とは、離れた儘にして電氣的にピユッと合するのである。（拍手）そこで其處に現はれて來る力を示したのが非生

現生と云ふ、此の人間の世の中に出て來られる因緣であります。

諸〳〵の善男子よ、如來は諸〳〵の衆生の小法を樂へる德薄垢重の者を見ては是の人の爲に、我れ少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと說く。然るに我れ實に成佛してより已來、久遠なること斯の如し、但だ方便を以て衆生を敎化して、佛道に入らしめんとして是の如き說を作す。

久遠常住の如來であるけれども、衆生を救ふが爲に此處に出て來て、少くして出家し――即ち十九出家とも、二十五出家とも申しますが、二十五が本當であります。二十五にして出家して、阿耨多羅三藐三菩提を成就したと云ふことを說くのは、是れ皆衆生の機緣を量つて、其の者に應じて現はれて來たのである。之を非生現生と云ふ、本からの佛だから、始めて生れたのではない、生ずるに非ずして而も生を現すると云ふのである。元よりある有明の月であるけれども、窓を明ければ其處にはつきり月を眺められると云ふ關係である。今生じたのではないけれども、有々と汝等の前に見えるやうになつた。天竺に出られなくともお釋迦樣は此處に本から御座る、眼に見えない所にも御座るけれども、吾々の住んで居る所に顏を出して下さつたのである。月は何時でもあるけれども、山の蔭に蔽はれて見えない、それが有々と東の山の端に形を現はした、月今生ずるにあらざれども、はつきり見える、それを非生現生と云ふのである。月西山に沒したからと云つても、月が無くなつたのではない、山に蔽はれて即ち月を見ない、釋尊は跋提河の邊りに涅槃に入ると雖も、山に蔽はれた月の如きもので、今も現に我等の頭上に光を放つて居らるゝのが、壽量品の信仰であります。

(三二)現身說法の妙化

其の次は形聲の益と云ひまして、形を現はして來たことと、說法せられた事とを說明された。

諸〳〵の善男子よ、如來の演ぶる所の經典は皆衆生を度脫せんが爲なり、或は己身を說き、或は佗身を說き、或は己身を示し、或は佗身を示し、或は己事を示し、或は佗事を示す、諸〳〵の言說する所は皆實にして虛からず。

如來が說法されたお經は皆衆生を濟度する爲に說いたものであるが、此の中には己身と云つて佛の事も說いた、又佗身と云つて菩薩から以下地獄界に至る九界の事に就て、自分の働きを說いたこともある。又佛の身を示したこともあるし、菩薩以下の身を現はしたこともある、佛に關する說明をした事もあり、菩薩以下の事を說明したこともある。それ等は皆衆生を敎化するが爲であるから、方便とは云ふても實は眞實のものであつて、嘘を吐いたと云ふことは一つも無い。方便と云ふものは何時も申す通り、二階に昇る梯子見たやうなものであるから、止まつてしまへば詰らぬ、梯子を以て住居とすることは出來ない、「お前の住家は何處だ」「統一閣の梯子の段です」「馬鹿な事を言へ、梯子段に住ねが

出來るか」「でも私は上にも昇らんければ下にも降りない、梯子の中段に何時も居ります」（笑）是は餘程變な奴だ、そんな事ではいかぬ、そんな梯子の段にブラ付かないで、昇るならトン〳〵と昇れと言はなければならぬ。所が方便のお經は引掛つて、眞實の法を知らぬ者は、永い間梯子段に引掛つて、其處で腰を掛けて煙草を吸つて居るやうなもので、餘程調子が變つて居る、（笑）實は餘り方便などに引掛らずにズッと行きたいのである。それを日蓮聖人は、

今末法の日本國は醍醐一實の國にして本門の直機なり。

と仰しやつた。此の直機と云ふのはどう云ふ機根かと云へば、今エレベーターと云ふ器械があります、十二階或は三越などへ行くと、變な箱の內に這入つて腰掛けて居る內に、ッーッと二階でも三階でも昇つてしまう、あれです、末法の日蓮聖人の好きなのは彼れである。一段々々梯子段をコトリ〳〵やつて、あゝ腰が痛いと云つて途中で休んだりするのは、極く日蓮聖人は嫌ひである、腰掛

けて居る間にグーッと昇つて　パッと出るとモウ三階だ、是が良い、末法の今日は幾ら佛教を容易く理解さすからと云つても、何時までも方便ばかり説いて居つてはいかぬ、此處も方便、彼處も方便、餘程行つてモウ來かたと云ふと未だ方便……（笑）それではいかぬ、手ッ取早く――方便も全つきり無くては分るまいから宜い加減にして、此處が眞實だと云ふことを日本人には與へなければならぬ。（拍手）そこで話が少し荒つぽくなるけれども、全體梯子の段に腰掛ける奴が惡い。（笑）佛教に於ては方便などに引掛るべきものでないのだ、方便と云ふものは即ち其處を通つて行くべきものだ、例へば家を拵へる足場である、家が出來て居るのに何時までも足場を置いておくと云ふことはあるべき事でない、（拍手）邪魔になつてしやうがない。そこで今茲に説いてあります通り、佛は色々説いたが、皆開顯すれば眞實である、此の中に形聲の二益と云ひまして『説く』と云ふ字と『示す』と云ふ字がある。示すと云ふのは形を示す方である。己身を示し佗身を示してあるから、色々様々に現はれて來る――日本の神様にもなつてお出でになる、何にでもなつてお出でになる。己身と云ふ佛様に屬する身を示し、或は佗身と云ふ佛様以下の九界の身を自由自在に示す。それから説くと云ふ方は己身を説き佗身を説く――是は即ち聲の方の説法であるから、此の中には方便の教もあり、眞實の教もあり、一切經は皆ある、そこで此の二つを形聲の二益と云ふのであります。で此の形を示し法を説かるる根本に於ては、前に申します所の意輪――一切衆生を大慈大悲の眼を以て見る意輪と云ふものがある、お自我偈の終りの方にある、何を以てか衆生をして無上道に入り速に佛身を成就することを得しめん』と云ふのがそれである。あゝ可哀相だ、どうして救はうかと云ふ、大慈大悲の意輪と云ふものから、身を現じ法を説くと云ふ働きが現はれて來て居る。即ち親切が現はれて來たから、色々に身を現じて、日本には日本の神様となり、印度には釋迦如來となつて、何處にて

も形を現はし法を説いて衆生を教化せられるのである、直接身を現はさなくとも、吾々の精神の中にも、諸君の精神の中にも、即ち或る場合に於ては佛様が心に宿どりたまふのである。

(三三)本佛感應の妙致

日蓮聖人は、南無妙法蓮華經と唱ふる者の心には皆此の釋迦牟尼佛が宿つて居られると言はれた、即ち『佛のやどらせ給はねば唱へ難き題目なり』とまで仰せられた。(拍手) 日蓮が頭には大覺世尊やどらせたまふ――南無妙法蓮華經と唱ふる者には一人〳〵に皆お釋迦様が一緒になつて下さると云ふやうな意味がある、其處まで行かなければ宗教は力が無い、(拍手) 日蓮聖人が一人で天下を背負つて立つと云ふ時になつたならば、日蓮聖人の背中にはお釋迦様がある、お釋迦様は向うに在つて、此方が手を合せて拜むのであるけれども、自分の背中にお釋迦様があつては拜む譯に行かぬから、自分の頭の上からお釋迦様が頭を出だし、日蓮が頭には大覺世尊代らせたまふとなり、(拍手) 日蓮は誠に言ふに足らぬ者であるけれども、頂く釋尊は即ち一切衆生を濟度する大覺世尊である、日蓮が手に執る物は釋尊出世の本懷たる法華經である――此處に日蓮聖人の絶對の權威を生じて來る。常樂院日經上人の爲さつた事がやはりさうである、日經上人は張子の日蓮上人を背負つて歩かれた、木像では重くていけないし、小さいのは嫌ひだから、大きな張子で環が附いて居つて、色々説法する時に、此の上から日蓮聖人の頭が出て來る。日經は即ち耳を斬られ鼻を斬られ、見るも淺ましいやうな姿になつて居るけれども、我が説く所は此處に顔をお出しになつた日蓮聖人が仰しやるのであると云ふ、(拍手) 其の時には日經上人は天下に畏るゝ者はないのである、是が宗教の妙致である、宗教は卑屈だと云ふのは、何も知らぬ者の言ふことである。頭を無闇に下げるのは卑屈だと云ふが、斯う頭を下げて今度頭を上げた時分には、非常に大きな絶對の力を背負つ

て立つて居る、頭を低げる所は意氣地がないやうだけれども、今度頭を上げて天下に向つて働く時は、絶對の威力と一致して働いて行くものである。（拍手）

てあるから宗教の信仰位强い力を現はすものはない。木片微塵になつても何とも思はぬ、こんな肉體は木片微塵となつても、我が精神の信仰は滅びるものでない。體を以て自分と思つて居るから弱いのだ、蚤が咬んでも痛いのだ、ちよつと電車に蹴躓いてもやられてしまう、實に危險千萬、薄弱千萬なことである。瓦を抱いて石の上を歩むやうなもので、ポンと落せば割れてしまう、是だけが自分だと云ふのは全くどうも賴り少ないことであります。併し此の内にある生命と云ふものに至つては、何者も殺すことは出來ない、爆裂彈を以て打碎かれても、體は木片微塵となつて、飛ぶけれども、生命と云ふものは決して滅びない。（拍手）唯だ生命の傷を受けるのは、鐵砲や刀ではない、惡心と云ふものである、惡い思想を吹込まれて惡心を起し罪惡を犯す、自分の罪と云ふものは己

の精神の内に深く喰ひ込むものである。（拍手）警戒をすべきものはそれだけである、吾々の本當の警戒は、己の精神が腐つて罪惡を犯して罪を作つて、精神の内に己を殺す所のものが這入つて來ることを警戒せんければならぬ。（拍手）てありますから如何にも宗教の信仰は人を强くする、慰安を與へ、希望を與へ活動せしむるものは宗教であります。

斯くの如くにして釋迦如來は大慈大悲の心より樣々に身を現はして法を說かれた、此の中に阿彌陀とか地藏とか云ふものが澤山出て來る、併し本は此の本佛の慈悲より出てたので、此の始めなき以前より活動して居る久遠實成の釋尊の大慈大悲之に向つて吾々は信仰を捧ぐるのであります。之に直徑的信仰をするのであります。其の間の方便に於て現はれたものが善いとか惡いとか、大きいとか小さいとか云ふことはどうても宜い。日蓮が弟子とは即ち此の久遠實成の大慈大悲の釋迦如來を信じて、南無妙法蓮華經と唱へる者である、是れ即ち

日蓮聖人の教へし信仰であります。（拍手）

此處が一段落でありまして、是から此の佛様が如何に賢い方であるか、如何に法をお説きになるかと云ふやうな事から、段々進んで活動の方面が續いて居るのであります。お經の説明は是で措きまして、尙ほ少しばかりお話をして今夜の講演を終りたいと思ひます。

（三四）本佛實在の信仰意識

今まで述べた所に依りますれば、壽量品の教は如何にも圓滿な思想として現はれて居ることが分るのであります。是は議論として今までお話しましたけれども、議論として考へては濟まぬことであります。日蓮聖人の仰しやる通り、吾々が法華經を見ると云ふことは、唯だ之を文字として讀んだり、理窟として解釋するのでは濟まぬのであつて、之を心に讀み身に讀むと云ふことでなければならぬ。そこで難を受ける事でありましたら、實際に難に値はんければ役に

立たないのでありますが、本佛を信ずるとか本佛の實在とか云ふことになりますれば、吾々の心なり吾々の精神が、常に此處に居られる本佛を確實に信じなければならぬのであります。お經などを離れてしまひ、理窟を離れてしまつて自分の精神を一度眼を瞑つて考へたならば、何時も常住不滅の如來の大慈大悲の光が、我が頭の上を照してお居でなさる、如何なる事があつても此の信仰を失はぬと云ふ決心覺悟を定めて、今身より佛身に至るまで此の本佛の大慈大悲に對して一點疑の心を懷かないと云ふ信仰を、自分の心に鍛え上げなければならない。（拍手）さうして朝起きた時、顏でも洗つたならば、先づ其の佛様の有難い事を思ひ起して、さうして掌を合して南無妙法蓮華經と唱へる、何遍お唱へしろとは言はない、實際其の本佛の有難いことを感じて、本當に南無妙法蓮華經と唱へるのであります。さうして自分の爲に守つて頂くことゝ又自分を導いて頂くこと、自分の惡い所があつたら段々改まるやうに、此の人生に處し

ては歡喜を失はぬやうに導いて頂いて、國の爲めにも世の爲めにも盡す人と爲り、さうして人生の果報を終りますれば、常住不滅の佛樣にまでして頂くと云ふやうにお願ひする、一日の中に少なくとも二度や三度は思ひ起して、別段坐つてお經を讀まぬでも、道路を歩いて居つても宜いから、實在の如來――其處にお居でになる佛樣の事を想ひ起して――日蓮聖人は、日暮に大變美しい雲が現はれて居れば、それを見て佛樣が其處に御座ると思ひ、月を眺むれば月を見て、其處に佛樣が御座ると思ふと云ふことを仰せられたが、どうかさう云ふ風にお考へを願ひたいのであります（拍手喝采）

（三五）本佛の妙智を明す

今日は第八の符號よりお話をする順序であります。此の所はどう云ふ事をお說きになつて居るかと申しますれば、本佛の御智慧よりして世の中の眞理をお照しになつて居ることは、少しも過ちのないものである、本佛の智慧は廣く宇宙法界をお照しになる時に於ても、其の實相をお覺りになつて居る、又吾等人々の或は苦み、或は迷ひ、其處に樣々なる事柄が現はれて居る人類の狀態に於ても、其の眞實をお覺りになつて居る、總ての事柄に就て如來の大智慧は誤まる所なく、之をお照し遊ばされて居ると云ふことをお說きになつて居るのであります。之を壽量品の六句の知見と申します。

所以は何ん、如來は如實に三界の相を知見す、生死の若は退若は出有ると無く、亦在世及び滅度の者無し、實に非ず虛に非ず、如に非ず異に非ず三界の三界を見るが如くならず、斯くの如きの事、如來明かに見て錯謬有ること無し。

イ、慈悲と智慧の不離

此處に注意すべきは、初めに『所以は何ん』と受けてある言葉であります。『所以は何ん』と云ふのは、前に說かれたる事柄の意味合を說明してあるので、前に

説かれた事柄と云ふのは、此の本佛の慈悲が説いてある。其の本佛の優しい所のお考は、總ての迷へる者を救ふが爲に何時も慈悲の光を放つてお居でなさる、雷にそれが遠い所から慈悲を放つて居られるばかりでなくして、吾々人間に近く―吾々人間の世の中にお生れになつて、吾々と同じ智慧、同じ感覺、同じ苦み、總て人間の經來る所の事柄を實際に經驗したまふて、丁度それに適當した

る所の敎をお立てになつたのである。此の事は前にも申述べた通り、佛敎には多くの佛様の事が説いてあるけれども、外の佛様は誰も吾々の世界、即ち此の地球上にお生れになつた者は無いのである。唯だ一人釋迦牟尼佛は明かにこの人間の世の中にお生れになつたのである、さうしてお釋迦様の最も尊いのは、自らの人格を以て衆生を敎化せられた事である。吾々迷へる方に於ても中々の強い力を有つて居る、惡を爲すべく、迷ふべく、苦むべく強い力を有つて居る所の吾々であるから、生ぬるい者に出會つては中々改心をしない、寧ろ向ふの者をも共に惡に導く程である、惡化する力を有つて居る所の者である、てありますからして、一人の身を以て此の無數の人類の中に生れて、此の惡の集團であり、墮落の團結である所の人類を濟度しやうと云ふには、非常なる強い力のある人格を以て當らなければならぬのである。而して釋迦牟尼佛一人此の人類の世にお出ましになつたが爲に、人類の相場を狂はして、墮落に墮落を累ね、苦みより苦みに墜ち込む者を引留めて、暗きに向へる者は明るきに向はしめ、墮落に進まんとする所の者には向上の希望を與へると云ふ風に、此の人類の大反省を促されたのは、正しく釋迦牟尼佛の人格の力であります。（拍手）假に他の佛様が有難いと云ふことを感じたとしても、それは釋迦牟尼佛の人格を通して其の佛様の事をお話になつたのであるから、如何に有難いことであらうとも、やはり釋尊の人格の感化であります。（拍手）又唯だ其の人格が整うて居つたばかりでなく、如來は身を以て衆生を導きたまふことは今申すやうな譯でありま

すけれども、殊に佛陀の秀でて居らるるのは、有ゆる事柄に就て教訓を與へて説法教化し給ふたことであります。其の説法教化が如何に智慧の深い人でも面倒な問題でも、それを能く捌いて成程さう云ふ事であつたかと思はしめる、非常な深遠な、古今の人々が迷うて居る所の此の宇宙の大法則に向つても、又吾々の生れたり死んだり、様々に經廻つて居つて、而も其の事柄を知らない、吾々の命――吾々の生命は如何なるものであるかと云ふことを自ら了解しない者に向つて、此等の難かしい問題をいと易く釋迦牟尼佛は、智慧ある者にも智慧なき者にも了解せしむる所の教訓をお與へになつたのである。小さい事に於きましては、其の人々の上に現はれる苦みも、其の人々の上に現はれる所の罪惡も、悉く之を矯め直ほす力をお有ちになつて居つたのである、それが一々教訓を以て導かれて居る、『貴様は分らぬから話にならぬ』と云ふことは仰しやらない、最も懇切丁寧に、全く無智識なる者であつて、迚も普通の事さへ了解し得ない

者にも此の深遠なる宗教の信仰を、迷信でなく形式でなく精神の底より了解すべき教訓を與へられしが釋迦牟尼佛であります。宗教として秀でたる働きを爲したる者は、古今東西澤山あるけれども、それは上つ面からして一應人を導いて居るのである、形の上から云へば秀でゝ居るけれども、其の人の精神の底の泉を汲んで、其の人の精神の底の光を導き來ると云ふことに至つては、釋迦牟尼佛の教訓ほど至れり盡せるものはないのであります。（拍手）其の教を分けて考へますれば、所謂八萬四千の法門と申して限りなく現はれて居りますけれども、大體の目的となさる所は、人を賢くすると云ふことも無論佛教の教にはあることで、愚癡なる者に智慧を與へ暗き者に光を與へると云ふことは、佛陀の御考へになつて居ることであります。決して一般の人をして哲學者たらしめやう、無學なる人をして理窟つぽい人にしやうと云ふやうな事をお考へになつたのではなかつたのであります。今の學校で人を教育して、無智識なる

者に智識を與へ、無學なる者を學者にし、理窟を知らぬ者に理窟を揑ねさすと云ふやうな、今の人が考へて居るやうな事を目的になさつたものではないのであります、無論さう云ふことは人間としては學ぶべき事であると云ふことは、仰せになつて居ります、大工を以て一生を暮さうと思ふ者は、大工の棟梁の所に弟子入をして學ぶべく、左官となる者は、左官の親方に弟子入をして學ぶべしと云ふことは、無論お勸めになつて居るけれども――お釋迦樣は何事も御承知になつて居つたけれども、大工の棟梁として家の建て方を弟子を集めてお敎へになつたと云ふことは無いのであります。さう云ふことは社會に於て其の人がある、佛樣に據らぬても、今日でも大工にならうと思ふ者が佛敎に入つて來て、お釋迦樣の前に向つて『どうぞ立派な大工にして下さい』と云ふやうなことを願ふより、良き棟梁を選んで弟子入をした方が宜いのであります。さう云ふ事をお釋迦樣は理想せられて居つた譯ではない、それは世の中に人がある。

さう云ふ事はやるべき事だけれども、隨分先生は澤山あるのである。

ロ、憂悲苦惱の濟度

然らば世の中に缺けて居るものは何であるかと云へば、此の人々が皆苦みに沈んで居る、憂悲苦惱――憂ひがあり悲みがあり、苦みがあり、惱みがある、如何なる地位に居る者でも、如何なる階級に居る者でも、如何なる人でも賢不肖となく、男女となく、老幼となく、人間は一種拔くべからざる所の苦痛と云ふものを精神に負うて居る。（拍手）それは無いと云へば無いやうなものである。ナーニ人間の世の中は面白いものだと云へば面白いやうに思はれるけれども、極く正直に深刻に人々の精神を見ると云ふと、何者か其處に心を襲うて居る所のものがある。其の苦みをお釋迦樣は悉く拔いてやらうとなさつた、それは貧乏に苦む者もあり、病氣で苦む者もあり、又樣々なる人間の世の中の苦みと云ふものは、其の地位に當つて見なければ分らぬものである、役人になつて見

ない者は役人の苦勞は分らない、坊主になつて見ない者には坊主の苦勞は分らない、『坊主になつたら苦勞はあるまい、別に旨い事もなからうけれども苦勞はあるまい、油揚食つて欠伸して居つたら宜いだらう』と世間の人は思ふけれども、中々さう云ふものではない、やはり坊主になつて見れば、檀家の中に面倒な事を言ふ親爺もある、性の惡い婆さんもある、（笑）譯の分らぬ奴もあつて、色々な事を言ふ、まアざつと言へば、百軒檀家があれば百人の姑のある所へ嫁に行くやうなものである。（笑）是は吾々は坊さんであるから、中々坊さんと云ふ者も面倒なものだと云ふことを知つて居るけれども、役人生活をしたことはないから、吾々は役人の苦勞は分らぬ。併し地位が違つても必ずや人間には種々の苦と云ふものが附いて廻つて居るものであるから、どうぞ之を悉く拔いてやりたい、如何なる苦みでも悉く精神の底から除き去つてやりたい、拔苦與樂――苦を拔いて樂を與へてやりたいと云ふのが釋尊の念願である。それ

も唯だ世間の者は、金の無い者に金をやつたらそれで苦勞が拔けるだらうと思ふけれども、人間はさう云ふ事では救はれないのである、金の無い人は金を貰つたら宜いと思ふけれども、今度金が懷中へ這入ると直ぐ他の苦勞が突擊して來るのであります。（拍手）金の無い時は金の事を苦勞に思ふ――吾々の心はさう幾つも働けないから、金の無い時には其の方を心配して居るけれども、其の方の備が出來ると又此方の方が破れて來ると云ふことが直ぐ分つて來る。（笑）實にそれは妙な有樣に出來て居るものである。盈つれば虧けると云ふことがある通り、餘まり何處もかも安心だと思ふと今度は命が無いやうになつて來る。（笑）彼の有名なる秦の始皇帝と云ふ人は、支那の戰國の時代に出てて、卑しい身分から起つて支那の當時六つに分れて居つた國を悉く統一して、四百餘州と稱した彼の大きな領土を自分の權力の下に併せ得たのであります、さうして自分に反對する者は悉く斬從へてしまひ、又學者で面倒な事を言ふ者は、大き

な坑を掘つて、生きたなり皆投り込んでしまつた、三十萬人を坑にすと云ふのでありますから、餘程大きな坑を掘つて置いて、理窟でも言つて面倒な批評でもしさうな奴は、片つ端から其の中に投込んでしまつた、是で大分天下は靜かになつた譯である。（笑）併し未だ北の方に匈奴と云ふものがあつて、それが攻めて來るからと云ふので、蒙古の方に向つて萬里の長城と云ふものを築いて、それから兵備を嚴にして置かんければならぬと云ふので、大きな阿房宮と云ふものを建てゝ、さうして其の内で防禦の兵を練り、是ならモウ恐るべき者は無い、面倒な事を言ふたり屁理窟言ふ奴も居らぬ、外からは一萬里の長城で誰も攻めて來られないと考へた、所が自分の命と云ふものが危なくなつて來た、是は人間は取りに來ぬけれども、人生の無常と云ふ奴が起つて來た、是はどうもならぬと思つて、不老不死の藥――死なない藥があると云ふことを聞いて、それを取りに行かうと云ふことになつた。それは蓬萊ケ島と云ふ所に在る、それは何處であつたかと云ふと、日本であつたと云ふて居りますが、能くは分りませぬ、けれども支那には仙人、道士と云ふ者があつて、始皇に申上げた、『あなたは折角防備が出來たけれども、不死の藥を飲んで置かないと何時死ぬか分らぬ』『それは何處に在るか』『蓬萊ケ島と云ふ所にあります』『それぢやそれを取りに行かう』と云ふので、大勢の家來を連れて段々海の方へ出掛けて、平沙と云ふ海岸の所まで行つた所が、其の時病氣が起つて、到頭其の海岸で死んでしまつた。其時に始皇が『今死んでは詰らぬ、あゝ死にたくない』と言つたとは、歴史には書いて無いけれども、定めし心中には、『あゝ飛んだことになつた、こんな事なら萬里の長城などを拵へないで、あんなにバタ〳〵せぬでも宜かつた』と思つたことであらうと思ふ。

さう云ふものでありまして、人間の苦みと云ふものは分らぬものである。自暴くそになつて居る時は成程一時苦みが無いやうだ、ビールでも飲んで醉ぱらつ

て、『ナニくそッ、借金なんか怖いものか』と言つて居る時には、一寸苦勞が無いやうに見えるけれども、それは酒に醉つて居る間だけ無茶なのであるから、話にならぬ、併し心が靜まると云ふと、どうも彼方からも此方からも苦しいやうな事が襲ふて來る、自分の身は心配は無いけれども、どうも子供が多いので俺の一生は宜いが突然死ぬと此の子供がどうなるかと思ひ、又女房は優しい可愛いゝ奴だけれども、他に身緣の無い奴だから俺が死んだら困るだらう、(笑)斯う云ふやうな色々の事が何處からか襲ふて來るのであります。必ず人間の心には或る一種の苦痛が襲ふて來るが人生である、釋尊が『三界に生るゝ者必ず苦あり』と言はれた事は、決して吾々を欺かぬことであります。そこで其の苦みを拔くが爲に、有ゆる敎訓をお與へになつたのであります。魔法使ひ見たやうな事で騙して置いて『サア拔けた』と云ふのではない、『成程斯くの如く考を極めて斯う精神を向ければ、私共を襲ふて來る苦みは右から來ても左から來て

も悉く追拂ふ力が、自分の精神に出來る』と云ふことを、人々に與へたまうた。それが即ち佛敎の信仰、安心立命であります。

ハ、煩惱罪惡の善化

いま一つは即ち罪惡に傾く所の精神——苦痛の方は、善人にも苦痛がありますから餘程廣いが、善惡と云ふ上から云ふと、人間幾分かは善に向いて居る人がありますけれども、先づ是も八分通り九分通りは、放任して置けば惡い方へ行くものであります、餘程警戒の綱を締め上げて置かぬと云ふと、手綱を緩めれば直ぐ吾々は墮落する傾向を有つて居るものであります。隨分人間と云ふものは厄介な者であります、長い文明を傳うて來て今日未だマゴ〳〵して居るのですから、是は大したものではありませぬ。(笑)そこであります、其の罪惡に傾くものをして善心にしやうと云ふことの爲に、如何なる者でも佛は之を說法敎化せられた、であるから佛の敎化せられた惡い者は、提婆達多のやうな

者、或は阿闍世王のやうな者、或は鴦掘摩のやうな者、其の他澤山にあります、それはどうしても斯うしても仕方が無いと云ふやうな兇惡なる者を捉へて、お釋迦樣は皆之を敎化せられた。お釋迦樣が今でもお在世になつたならば、それは日本人でも餘程善くなるであらう、あゝ云ふ偉い人が日本にお生れになつて、今でもお居でになつて時々上野で說法があると云ふことにならうものならば、それは日本は餘程善くなるのであります。（拍手）故に釋尊の有難いのは、即ち此の大慈大悲を以て人の苦みを除き、人の惡を矯めて善に向はしめると云ふことである、此の苦を拔いて樂を與へ、惡を誡めて善を爲さしむると云ふとが、釋尊の吾々に與へられたる慈悲の光と云ふものであります。

二、智悲分離の謬見

そこで其の慈悲の光がどう云ふ所から出て來るかと云ふことに就て、『所以は何ん』と斯う受けたのであります。こんな偉いお釋迦樣の慈悲はどうして出たかと云ふと、それは馬鹿では出て來ないと云ふことに說明されてあるのであります。佛敎の研究に就きましては、智慧の佛と慈悲の佛と云ふて二つに分けて居る人がある、何時も淨土宗や眞宗が引合に出ますけれども、是は質の惡い宗旨であるからどうしても出るのであります。（笑）何故質が惡いかと云ふと、眞宗や淨土宗の人が腹を立てたり色々するけれども、何も腹を立てることはない（笑）お釋迦樣のやうな尊い人を、『お釋迦樣は說法することは上手だけれども親切の足らぬ人だ』と言ふのである、阿彌陀樣は慈悲が深くて親切がある、唯だ親切だけではない、救ふ力を有つて居る、お釋迦樣は親切が足らぬのみならず、救ふ力が無い、講釋師見たやうに說法するだけの事だ、佛敎に斯う云ふ觀方が何處にありますか、（拍手）小乘の初め――始めて小乘の中に疑問の起つた場合にも、釋迦如來に對して救ふ力が足らぬなどと云ふやうな事を言つた者は一人もありませぬ。（拍手）どう云ふ工合に有難く說かうかと云ふことに就て、

有難く説き方の淺い深いに就て議論はしたけれども、初めからケチを附けてやらうと云ふ考を有つて居た者はない、是は淨土宗や眞宗のやうな變つた頭でなければ出て來ない。（拍手）基督教なら基督教を考へて御覽なさい、基督教にも流派が澤山あるけれども、基督にケチを一つ附けてやらうと云ふやうな考で出來た分派と云ふものは無いてありませう。孔子なら孔子の論語に就て、古來色々に註釋して議論もあつたけれども、何處かで孔子にケチを附けてやらうと云ふやうな學者はありませぬ。眞宗や淨土宗は餘程流變りの事を考へたものである。（笑）お釋迦様は智慧はえらかつた、法華經などを説いて御座るから中々偉いものだけれども、親切は迚も阿彌陀様だけには行かぬ、弘誓の力と云つて阿彌陀様は衆生を捉へて淨土へ抛り込む力がある、お釋迦様は話だけするのであるから、力が無いと云ふ、そこでさう云ふ事の間違が、此の『所以は何ん』と云ふ所に繋がつて居るのである。此の大きな親切――今申しましたやうに此の世界の總ての苦む者をして樂みを得せしめやう、惡に傾く者をして善を爲さしめやうと努力せられた所の此の大慈大悲を有つて居るお釋迦様は、それは復大きな智慧をも有つて居られるのである。さうして其の智慧を以て、此の者には斯う言ふて聽かしたら宜いと云ふことをお考へになるのであるから、唯だ親切ばかりではない、母親の親切見たやうに智慧が足らずして、言ふて聽かすにもねつから善い事が出ない、何でもかでも『貴様しつかりせイ』と言ふ、そこで子供の方で『貴方のしつかりせイは百遍聽いた』（笑）と云ふやうなことになる。お釋迦様はさう云ふ下手なやり方はしないのであつて、ちやんと向ふが納得して成程と心に了解するやうになさるのは、親切の奥に大きな深い智慧が充實して居るからして是が出來るのである、（拍手）大きな慈悲は大きな智慧と云ふものが其の裏に附いて居る、即ち釋尊の大慈悲と云ふものゝ中には、智慧が一杯に滿ちて居ると云ふことを此處で説かれたのである。斯くの如き親切は何故にさ

う云ふ風に立派に働くかと云へば、所以は何ん、即ち斯の如き大智慧あるが故にとなるので、『所以は何ん』と受けた所が味ひであります。此『所以者何』の四字でモウ法然上人や親鸞上人の主張はいけないと云ふ事が分つて居る、親鸞上人は此の慈悲と智慧の間を切つてしまつて、是は慈悲の佛、是は智慧の佛――釋迦如來は智慧の佛の方で慈悲が足らない、阿彌陀様は慈悲の佛だ、斯う云ふ風に切つてしまつたからいけない。是はさう云ふ風にしてお釋迦様に少しケチを附けて來ぬと、阿彌陀様の光が出て來ないからであらうが、其の行き方は善くないことであります。『それでも法華宗の方でも阿彌陀様を邪魔にするぢやないか』と言ふ人もあらうが、法華宗の方では少しも邪魔にしない、邪魔にならないのである。（笑）阿彌陀様の事は幾ら説いても少しも差支はないのであります、それは皆お釋迦様の方便を以て説法教化せられることでありまするから、法華經の中にも此の前にお話した通り『或は名字の不同、年紀の大小を説く』と云ふてあるから、名前は幾ら違つて居つても少しも差支は無いのであります。

ホ、本佛妙智の内容

そこで其の智慧はどう云ふ御智慧であるかと申しますと、『如來は如實に三界の相を知見す』――此の『如實』と云ふのは眞實の通りと云ふことである、間違なく有の儘に三界の相を知見したまふ。三界と云ふのは天竺では欲界、色界、無色界と云ふ三つの名前を立てゝ居りますが、今日の言葉にして言へば天地宇宙と云ふやうな言葉である。即ち此の洪い見渡す限り際限もない宇宙法界であります、全宇宙法界の相を眞實の通りにお覺りになつて居る。諸法の實相と云つても宜い、三界の相と謂つても宜い、同じことである。其の御覽になつて居る有様は、方便品にも詳しく説いてあつたし、今此處に來て繰返す必要は無いので、佛は全宇宙の大眞理をも又實相をも能くお覺りになつて居る。從つて今度は人間の方に就て言ふてある、此の生きとし生ける者が或は生れたり或は死

んだりして居るが、此の生れたり死んだりと云ふことが大きな問題なんである、どう云ふ風に大きな問題かと申しますれば、常住と云ふ事と生死と云ふことでありまず、常住と云ふことはズッと續いて居ることであります、生死と云ふのは生れた所から始つて死んだ所で切れるのでありますから、切れ〳〵になつて居る。生れて死んだ、それつきりだと云ふ、日本の人間は諦めが宜いです、死んだら無くなる、パッと消えてしまう、丁度蠟燭の火を吹き消したやうなものだと云ふやうな事を言つて居ります。洵に諦めが良いやうでありますけれども、併しさう云ふ事を言ふて居る人間は非常に臆病であります、生命と云ふものゝ常住を知りませぬから、之を喪ふたらモウそれが最後消えてしまうものと思つて居りますから、逃げられるだけ逃げて、臆病の限りを盡して遁げ廻る、所謂生命の常住無限を信じない所の者は力無きものであります、どうしても將來日本の人間が生命の無限常住と云ふことを信じないならば、日本の國は到底世界に雄飛することは出來ないものであります。（拍手）

一、武士道と生命の永存

昔は武士道の力に依りまして、一種の強い忠勇義烈の精神がありましたけれども、今日は新しき教育より來るのでありますから、其の方面も十分にはありませぬ。昔忠勇義烈のあつたと云ふものは、やはり忠勇義烈の裏を縫うて居るものは死んでも死なぬと云ふことであります。昔の忠臣を御覽になつたら皆さう言ふて居ります、現に楠正成は、七たび生れて國賊を滅ぼさんと言はれた。一遍位死んでも亦出て來る、復出て來る、七遍生れ代つて遂に朝敵を斃すと言はれました。死んで一遍に消えてしまうならば、七たび生れてと云ふことは言はれないのであります。（拍手）藤田東湖は無宗教のやうに人は言ひますけれども、それでも正氣の歌を御覽になつたら分りませう、彼の正氣の歌には、

死しては忠義の鬼となつて極天皇基を護らん。